
ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N - 過去編

オオガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A・
I・N - 過去編

【Nコード】

N7876Z

【作者名】

オオガラス

【あらすじ】

その人が傍に居たから、自分はまだ、ここにいる……

レイヴン

あの時の事を　今でも覚えてる

初めて乗った　A C

初めて握った　レバーの感触

初めて嗅いだ　硝煙の匂い

そして――…

初めて人を殺した　瞬間

『驚いたな……』

人を殺した　でも　それを咎める声は無い

あるのはただ　驚嘆の声だけ

レイヴン試験

レイヴンになるための通過点

要するに　人殺しになれるかどうかのテスト

今行われているのは　まさしくソレ

10歳になったばかりの頃

唐突に突き付けられた言葉

病院のベッドの上で告げられた

見知らぬ人からの言葉を

小さな頭で理解するまでに

長い長い時間を必要とした

「今日からここが 君の家だ」

退院してからすぐだった

そこもまた 見知らぬ場所

「...ここ...どこ?」

「君の 家だ」

静かに 噛み砕く様な言い聞かせ方

そして 他の質問は一切許さずに

強引に手を引かれ 中へ連れ込まれた

その 孤児院とは名ばかりの

豚小屋のような 最悪な場所に

いや 豚小屋の方が まだマシ……

「……や！」

そこは まさに地獄だった

「離しっ……！」

人権無し 安らぎ無し そして 人で無し

こんな所にいるくらいなら 死んだ方がマシ

雨の降りしきる中 そこを逃げ出した――…

「いたぞ……！」

「こつちだ！ 逃がすな……！」

後ろから聞こえてくる男の声に

怯えながら それでも足は止めない

息は切れ切れで 心臓は痛くて苦しい

でも止まらない 捕まりたくない

速度を上げる 息が切れる 足がもつれる

裏路地を走る 曲がり角を曲がり ひたすら走る

豚小屋
あの場所を逃げ出してから 1年近く経つ

現状は あまり変わってはいなかった

要するに いつ死んでもおかしく無い

ゴミを漁り 物を盗み ただその日を食い繋ぐ

そして 今日……

「見つけたぞ！！！」

ついに 見つかった

「あッ」

後ろを振り向き走りだす

焦りで足が絡まり転んだ

でも寝ている暇なんてない

立ち上がって駆け出す

足が重い

目の前が揺らぐ

息が出来ない

そして――…

「ああ！」

…道が…無い

「…あ…あ…」

壁にしがみつく

爪を立てて壁をよじ登る

「くっ………！」

ダメだ 何度やっても登れそうに無い

手が滑って掴まれない 指も掛けられない

「この先は行き止まりのはずだ！！」

「あっちだ！ 追い詰めたぞ！！」

2人の男の声に 小さく悲鳴を上げた

捕まる その結末が目に見えて

歯をガチガチ鳴らして震えていた

「…あつ…あ…や…」

嫌だ 捕まりたくない！

嫌だ 嫌だ 嫌だ！！

「あの先だ！」

迫る声 足音 人影

震える体 手足

もう1歩も動けない

「ほら」

それは突然だった

「……えっ?!」

壁の上から差し伸べられる手

「掴まれよ 追われてんだろ？」

あとはがむしやらだった

その差し出された手を掴んで

壁を蹴って蹴って滑りながら

それでも蹴って壁を登った

「あつ あれっ?!」

「……消えた」

壁の向こうから聞こえてきた

今まで追ってきた男達の

呆然とした呟き

「……おじさん……だれ？」

見知ら人に抱きかかえられながら

裏路地から 日の当たる表通りに出た

「お兄さん……だろ？」

不機嫌そうにその人は言った

「……おにい……さん？」

だから言い直した そしたら笑った

嬉しそうに笑って 頭を撫でてくれた

多分初めて 誰かの優しい手に触れた

気がついたら 泣いてた……

そのお兄さんは レイヴンだと言った

「レイヴンってなに？」 って聞いたら

お兄さんは笑いながら 「強い奴の事だ」

って言った 「なにをする人なの？」 ってまた聞いたら

今度もまた笑いながら 「何でもやるよ」 って答えた

だから言ってみた 「……だったらさ」

お兄さんは首を傾げて 「ん？」

「ハンバーグ作ってよ！」

「ハ…ハンバーグ？」

お兄さんは ちょっと困った顔をした

「できないの……？」

悲しくなった ウソツキかと思った でも

「OK 楽勝だ」

って言って作ってくれた……嬉しかった

でも……

「うつ……」

…ハンバーグは…マズかった

それから そのお兄さんと暮らす事になった

始めはちょっと どうして良いのか解らなかった

だけど すぐ慣れた とても楽しかった時間

そのお兄さんは 家に帰ってこない時もあった

その時は寂しいけど 必ず帰ってきてくれた

帰ってきた時は 本当に嬉しかった

それから1年が経った

いきなりお兄さんが言った

「ケリを付けてくる」

何の事が解らず　ただ頷くしか出来なかった

でも　必ず帰ってくる　そう思っていた

頭を撫でてから　お兄さんは出ていった

お兄さんの帰りを　ただ待った

いつまでも　いつまでも……

でも　いつまで待っても　帰って来なかった

行方不明だと言われた　死んだと聞かされた

そしてまた　一人になった――…

少しして知らない人が来た

この家の場所を使うんだと言って

そこを追い出された　また元に戻った

帰る場所も無くなった　待つ場所も無くなった

…何も…無くなった……

その日の残飯を漁ってる時だった

知らない男に声を掛けられた

またアイツらかと思って走りだした

でも ダメだった 腕を掴まれた

「見つけました」

端末越しに 男は誰かと話をしてた

「はい 恐らく」

見下ろす男の顔は無表情で

とても怖かった 震えていた

だから逃げ出そうと暴れた

でも 全然振りほどけなかった

とても力が強かった 人間じゃないみたいに

「解りました」

その男は頷いて 誰かとの話を終えた

ああ もうダメか そう思ってたら

「君は」 その男はしゃがんで言った

目線を同じにして　でも　その目が冷たくて
とてもとても怖かった

「一緒にいた人に　会いたくはないかい？」

それがお兄さんの事だってすぐに分かった

だから頷いた　何度も何度も頷いた

「……会いたい」

「どこにいるか　解るのかな？」

「……解らない」

「だったら　探せば良い」

「どうやって？」

「レイヴンって　知ってる？」

「……うん」

「だったら君が　レイヴンになれば良い」

「……なんで？　無理だよ……」

「もしレイヴンにならないなら　このまま死ぬだけだよ？」

「……嫌だ……」

「君を助けってくる人は もういないんだからね」

…嫌だ…死ぬのは…嫌だ…

「……レイヴンに…なる」

「良い子だ」

男はそう言って 頭を撫でてくれた

でも その人の手は 酷く冷たかった……

そして 5年が経った

一発の銃声が鳴り響く

それに続き 3発のミサイル

次々と目標となる敵に直撃し 破壊する

溜息を吐く 緊張がようやく解ける

動く物が何も存在しなくなる 自分以外

そのまま踵を返し その場を後にする

依頼を一つ達成

あれから5年 レイヴンとしての実力も上がり

それに連れて 名前もそこそこ売れ始めていた

この年でレイヴンって言う珍品扱いもあつて

企業からの依頼もばちばち来るようになり

一人でそこそこ稼げるようになっていた

でも 探している人は もう見つからない……

レイヴンをやってお兄さんの事を知った

？レオス・クライン？と言う男を追って

衛星？フォボス？に行き そして消息を絶った

恐らく すでに生きてはいないのだろう

でも ACから降りるなんて今更出来ない

だから今日も 何かを奪い殺すのだろう

あの時から 何も変わることも出来ずに……

『君に この依頼をお願いしたい』

バレーナ社からの遣いの男　今回の依頼主

『LCCが所有していた　この建物の調査だ』

目標の場所と　時間と　依頼内容を告げた

『難しい依頼ではないと思うが　どうか？』

ただの調査　こんなに簡単な依頼を受けない手は無い

「解った　引き受ける」

『よろしく頼む』

目標の建物は？アーデンリバー？にほど近い場所にあった

到着すると　すでに10機近くのMTと1体のACが待機していた

なんだこの大部隊　大袈裟すぎやしないか？

そんな事を考えていると　1機のMTが近寄ってくる

「話しは聞いている　君がもう一人のレイヴンだな？」

「ああ　そうだ」

「よしこれで揃ったな　では出発する」

短いやり取りを終えると　大行進が始まった

A C組は M T部隊の最後尾につくことになった

調査は何事も無く順調に進んでいた

依頼内容は調査だったが実質は護衛だった

M T部隊が調査の大半を引き受けていた

だからそれを ボーっと眺めていた

不意にもう一人のレイヴンから

不躰な呼び方で声をかけられる

「おい ボウズ」

自分に向けられた呼びかけだと

理解した瞬間 反射的に口から出た

「……なんだよ オッサン」

それが あの人との出会いだった

出会い

「オッサンね……」

男は鼻を鳴らして呟いた

「なんか用？」

ぶっきらぼうに言ってやる

ガキ扱いする奴は嫌いだ

「お前に一つ忠告」

「……なに？」

「もし死にたくなかったら 気を抜くな」

「……どう言う意味？」

「すぐに解るさ」

忠告なんて される覚えもない

ましてや今の実力なら余裕だろ

自分の力を過信していた

だからオッサンの言葉も

当たり前の様に聞き流した

外周をMTが調査し終わると

今度はAC組の出番だった

建物の中を端から端まで調べ尽くす

そこは 何の施設だったのか知らないが

かなりの大きさと広さを有していた

だが 動いている物は何も無く

ただ 重く鈍い足音だけが響いていた

「――よし こちらは異常は無い」

「こちらにも異常無し」

あらかた見て回ったが 結局何も見つからなかった

『了解 その辺で良いだろ』

隊長機のMTから無線が返る

程なくして 調査の終了が宣言された

「今回の調査 何が目的だったんだ？」

これだけの大部隊での調査 普通では考えられない

あまり人様の事に首を突っ込むもんじゃ無いけど

どうしても気になってしまった

『……ああ 気にするな』

「なんで？」

『良いんだ 何も無いのなら それで』

まあ 当たり前だけど 何も教えてくれなかった

『調査は終了だ こちらに来てくれ 揃い次第 帰還する』

「……解った」

そこで この通信は終了……の筈だった

通信を終了しようとした瞬間 ほんの小さくではあるが

確かに爆発のような音が聞こえた 何だ？

『どうした！？ 何があった！！』

隊長の男の 驚きと焦りを伴った叫び声

一体 何が起きているんだ?!

「どうした?! 何かあったのか?! さっきの爆発は?!」

『――…レイヴン! 大至急こちらに来てくれ!!!』

「どうした!?!」

『は…早く!! ヤツが…ヤツラが…!!』

そこで通信は途切れた 聞こえるのは耳障りなノイズ

「何か起きたみたいだ!!」

隣のレイヴンに話しかけようと 振り向いた時には

「先に行くぞ」

すでに飛び出していた

「…あつ…何なんだよ一体……」

舌を打ち ばやきつつもその後を追う

そして MTの部隊が待っているであろう場所に到着

「なんで!?!」

そこにはMTのカタチなど一つも無く ただ残骸が転がっていた

「何があつたんだ！？ 誰か！！」

呼びかけに答える者は誰もいない

機体からはまだ 煙が立ち昇っている

たった今まで戦闘が行われていたように

突然の轟音 その正体を理解する前に

真横に突き飛ばされていた 尻餅をついた

「何す……！！」

突き飛ばした相手に文句を言おうと 真横を見た

まさに目の前を 今までいた場所を何かが通過した

「いつまで寝てる気だ さっさと立て」

一瞬 何が起きたのか理解できなかった

呆然と 目の前のオッサンの乗る機体を見上げる

「何…が？」

オッサンは答えない ただ睨みつけていた

？何か？が飛んできた方を ジッと見ていた

立ち上がって オッサンの見る方に目を向ける

「……………何だ……………あれ？」

そこには 3体のACが立っていた

でも そいつらの機体構成が不明だった

今まで見たことも無いパーツで構成されていた

そして 3体とも同じ配色をしていた

気味の悪い 血の様な赤と 闇の様な黒

「やっぱりな……………」

オッサンが呟いた

「アレを知ってるのか!？」

その問いに オッサンは答えなかった

代わりに鼻で笑うと続けて言った

「まあた出やがったか」

そう言うや否やマシンガンを撃ちながら

赤と黒のACに向かって疾駆する

「…お…おい!!」

イキナリ事態は急展開

何が起きているのか理解も出来ない

でも ボサツと立ってる訳にもいかなかった

破裂音と共に迫る 2つのミサイル

そして 1体の赤と黒のAC

「そっちは任せたぞ!」

はい!?! 思わず目を丸くする

「任せたつて…え!?! ええ!!?!」

突然の幕開け 何も解せぬまま戦いが始まる

しつこく追ってくるミサイルを

何とか回避したのもつかの間

轟音が響いたと思ったら

次に巨大な火の塊が襲ってくる

レバーを引いてブーストダッシュ

全速でその場から後ろへ下がる

「うわっ！！！」

足元で火球が弾けて機体が吹き飛ばされる

「グ…グレネードランチャー?!」

爆風で舞い上がった土煙で 視界が遮られる

薄っすらと 土煙の中に巨大な影が浮かび上がる

何なのか解らない 突然現れた?それ?に向けて

右手のプラズマライフルを出鱈目に撃っていた

だが 今まで確かにそこにあつた影が一瞬で消える

「…ど…どこへ?!?」

音が聞こえた 空気を焦がすような音

「えっ?」

振り向いた時には遅かった

「……えっ?」

長く赤いものが振り上げられていた

「…ブレー…ド？」

頭が認識を拒否し 心が麻痺していた

現実を直視することを拒絶した

ここで本当なら 死んでいたのだろう——…

「そっちは任せたぞ！」

鈍色のACの中で男は 未熟なレイヴンに向けて叫んだ

赤と黒のACは 鈍色のACを挟み込むように展開した

鈍色のACはその場で佇んだまま 身じろぎ一つしない

赤と黒のACは ほぼ同時にグレネードランチャーを撃つ

だがそれを読んでいたかのように 鈍色のACは宙に飛んだ

行き場を失ったグレネード弾はそのまま直進する

赤と黒のACは お互いが放ったお互いのグレネード弾を

これを何事も無かったかのように回避する

それを狙っていたか 動きの止まった赤と黒のＡＣへ

鈍色のＡＣは頭の上に着地して そのまま踏み潰す

赤と黒のＡＣは その重みに耐えられず地に伏せる

鈍色のＡＣは 地に伏す赤と黒のＡＣに向けて

左腕のブレードを振り上げ そして叩きつけた

右手のマシニングを放ち もう１体の足を止める

ブレードでコアを貫かれた筈の赤と黒のＡＣが

鈍色のＡＣに向けてグレネードを構える

不可解だった 通常であれば中の人間は死んでいる

その筈なのに赤と黒のＡＣは 未だに活動が続けていた

それを 鈍色のＡＣは当然と受け止めていた

赤と黒のＡＣが構えたグレネード その砲身を掴み

放たれる前に斬り落とした そしてマシニングを

地に伏した赤と黒のＡＣに向けて銃口を構える

「良いから 寝てろ」

2度3度 機体が跳ね上がるかの様に暴れた

沈黙した機体を見下ろす その目は何処か悲しげだった

次に男は顔を上げて そして舌を打った

片割れのACが 赤と黒のACに背後を取られていた

マシンガンを構え 男は大声で叫んだ

「伏せろ!!」

「伏せろ!!」

その声に 頭よりも体が反応した

機体をその場にしゃがませると

赤と黒のACに 銃弾の礫が幾数も

幾百幾千も火花を撒き散らしている

それでも赤と黒のACは動きを止めない

「ぼさつとするな! 動け!!」

オッサンの声に反射的に右手の武器を構える

プラズマライフルを赤と黒のACに撃ち込んでいた

この至近距離　まず外す事は無い絶対の射程

だが　そんな甘い考えを打ち破るように　機体が消えた

「そんな?!」

有り得ない!!　ほとんどゼロ距離からの射撃

それを躲すなんて絶対に不可能なはずだ

でも赤と黒のACは　それをやってみせた

余裕の動きで距離を離す　まるで馬鹿にする様に

次は当てる　敵をロックする　FCSが敵を捕らえる

ロックオンマークが表示される　だから撃つ

でも　当たらない

「なんで!!?」

ロック　撃つ　ロック　撃つ　ロック　撃つ

「当たれ!　当たれ!!」

今までそうしてきたように

赤と黒のACにロックして撃つ

ちゃんと狙って引き金を引く

出来てるちゃんとやれてる

なのに全てを躲された

まるで当たらない

「…な…んで…?」

ちゃんとロックしてるじゃないか…なのに…何で!!??

声を上げていた 絶望に叫んでいた

まるで駄々っ子の様に泣きじゃくっていた

「当たらない…なんでだよ…」

一発も当たらない…このままじゃ…

「…イヤだ!!!」

脳裏に浮かんだ不吉な単語を振り払う

相手に狙いを定める ロックマーカ―が動く

相手を捕らえた事を知らせる 引き金を引く

……カチンと 空々しい弾切れの音が響いた

「…あ…あ…あ…」

どうする！？ どうする！？ どうする！！？

あと残っているのは…… そうだ！ ミサイル！

ミサイルならアイツにも効くはず！

ディスプレイを叩いてミサイルを選択する

視線を上げて そして絶望に悲観した

視界が 赤と黒の2つの色で覆われていた

「しまっ……！！！」

そのまま地に押し倒される

それを退かそうと必死に足掻く

カメラに映ったのは 奴の光る目

そして 振り上げた左腕とブレード

「…あ…や…」

死に魅入られた瞬間 手足が震え 体が動かない

あとは 左腕が降りて 刺されて それでオシマイ

この予想は外れなかった 赤と黒の左腕が降りてきた
目を閉じる 視界が暗くなる 多分 きつとこのまま

…………… オカシイ 嫌でも浮かんだ最後の結末

それが いつまで経ってもこない

そつと目を開けてみる

光が飛び込んでくる 生きてる

外を見る 状況が見えてくる

驚きに悲鳴にも似た声を上げてた

確かにブレードが突き刺さっていた

刺されていたのが赤と黒のACで

刺していたのは鈍色のACだった

「どう言う……………」

状況が掴めない これは……………なに？

混乱する頭 そこに飛び込んで来る一つの声

「あんまり手間を取らすな」

それは オッサンの声だった

「…え？…え？？」

もしかして…助けられた…？

鈍色のＡＣはブレードを引き抜くと

『さて…』 と言つて振り返る

視線の先には最後の赤と黒のＡＣ

いつの間にか傍観者になっていた

鈍色のＡＣがマシンガンを撃ちながら赤と黒のＡＣに迫る

だが赤と黒のＡＣは当たり前の様にその銃弾の雨を躲す

今度は赤と黒のＡＣの動く先に マシンガンの予測射撃

被弾した赤と黒のＡＣの足が止まった

そこに鈍色のＡＣがミサイルを２発撃ち込む

撃つと同時に鈍色のＡＣがブーストダッシュ

それを赤と黒のＡＣはグレネードを構え迎える

グレネードが放たれる直前 鈍色のＡＣが弾けた

OBを発動して一気に赤と黒のACとの間合いを詰める

放たれたグレネード弾の脇を抜けながら

鈍色のACはマシンガンの連射

被弾 被弾 被弾 被弾

仰け反る赤と黒のACに 鈍色のACがブレードを振り上げる

驚嘆した 赤と黒のACがカウターのブレードを振った

これは躲せない！？ 当たる？！

その予想は外れた 動きを読んでいたかのように

鈍色のACは 赤と黒の刃をやすやすと躲してみせた

そのまま鈍色のACは 赤と黒のACの背後を取る

マシンガンを相手の背に押しつけて撃つ

逃げられる距離ではない 射程0の連射

そして マシンガンを撃ち込んだ場所に

今度はブレードを突き刺した

赤と黒のコアから火花が上がる

そのままヒザをついて崩れ落ちた

鈍色のＡＣは それを見届けると

後ろを振り返って歩き出した

だが 赤と黒のＡＣが動いていた

膝をついたまま 右手がゆっくりと動く

後ろを向いたままの鈍色のＡＣへ向け

グレネードを その砲身を構えた

「後ろ！！」

咄嗟に叫ぶ その声と同時に鈍色のＡＣが振り返り

赤と黒のＡＣに向けマシンガンを構え そして撃つ

マシンガンは幾数もの薬莖を飛ばしながら

赤と黒のＡＣを鉄屑へと姿を変えていく

火花を散らし 体が仰け反り 動きが止まる

その最中 赤と黒のＡＣが最後の一撃を放った

絶叫の様に 雄叫びにも似たグレネードの轟音

それと共に 赤と黒のACも 炎を上げて沈んだ

目標

全ての赤と黒のACを 文字通り一人で倒した男

その傍らで佇んでいた 歯を食い縛りながら

「……なんで」

悔しかった 情けなかった

自分の今の實力なら 誰が来ても敵じゃない

そんな事を考えて そして何も出来なかった事実

「……なんでアンタは あんなのと戦えるんだよ」

それは ひがみ だったのかも知れない

「……なんでアンタ倒せるんだよ!? なんで!?!」

今まで自分一人で生きてこれた 戦ってこれた

「ロックだつてちゃんとしたし……狙いもつけた……」

見てよこのプラズマライフル! 高威力の最新型なんだ」

ACに乗ってれば何だつて出来た 人よりも上手く操縦できてた

「でも当たんなかったんだよ……なんで!?!……なんで……」

声が詰まる 涙で視界が歪み 上手く話せない

自分は強いと言う自負が 悉く崩されていった

「……ボウズ」

今まで沈黙していた男が 口を開いた

その口調は静かだが 圧倒されていた

「お前 戦いを何だと思ってる？」

「…な…何って…」

「性能が良ければ強いのか？ 威力が高けりゃ負けない？」

「ああ！そうさ！！」

「狙いをつけた ロックオンした それでも当たらないだと？」

「そうだよ！ 狙いはつけた！ ロックもした！

ちゃんとロック表示も点いた あとは撃てば当たる筈なのに……

きっとFCSが壊れてたんだ…でないと…こんなことには…」

「バカだろ？ お前？」

オッサンは小さく鼻を鳴らした

それに頭にキて怒鳴ろうとして

「FCSが壊れてたって？」

オッサンは馬鹿にした口調で続けた

「そうじゃないか！　そうに決まって……」

「FCSに　？　どうぞ撃つても良いですよ？」

なんて言われないとお前は撃てないのか？」

それが当たり前だ　それがACを操ることだ

そう言い返そうとして　でも言葉が出なかった

「弾を当てたきゃ先を読み　それでも当たらないなら当たるまで近付け」

「……でも……さっきは！」

「近くても当たらなかった？」

「ああ……！」

「お前のその頭はなんだ？　目は？　耳は？

機体の左手はなんだ？　右手は？　足は？

ただの飾りか？ 止まってるなきゃ当てられないか？」

「違う！！」

「だったら使え 相手の動きを見ろ 音を聞け

機体が弱けりや頭を使え 機体が良けりや腕を磨け

相手だって生きてんだ 黙って当たってくれる訳無いだろ？」

唇を噛む 何も言い返せない

自分は機体を操ってたんじゃない

機体の性能に甘えていただけだった

その時初めて思い知らされた

「当たる じゃなくて 当てる 自分の意思でだ」

「……自分の……意思で？」

「ああ 自分の意思でだ 戦況を読み 読んで支配しろ

お前がお前の力で 戦場をコントロールするんだ」

「戦況を…支配…」

「そうだ そして機械に頼り過ぎるな」

「……頼るなつて…でも！」

「もしお前が死んでも 機械は責任を取っちゃくれねえぞ？」

それは機械を言い訳にするなつて事が

自分の意志で自分が戦つて 自分の意志で殺せ

つまりそつ言つ事なんだろう

「死にたくなかったら 腕を磨け」

オッサンの言うことは確かにそうだ

正論だ 理屈は分かる その通りさ

「……でも…怖いよ…」

さっきの光景を思い出していた

目の前まで迫っていた死を

「アンタは怖くないのか？！」

こんなバケモノみたいなのと戦つて

死ぬかもしれないんだぞ！？」

気がつくと 体が震えていた

「…アンタ…怖くねえのかよ…」

自分の体を押さえる 震えを止める為に

でも 押さえたその手も 震えいていた

「……そりゃ怖えさ」

沈黙のあとで オッサンがそう言った

「下手したら死ぬんだ そりゃ怖い」

「…アンタ…でも…？」

「勿論」

意外だった あんだけ強いのに怖いと言う

臆面も無く怖いものを怖いと口にした男が

「でもな 死ぬかもしれないからって

ナニもしないんじゃ どのみち死ぬぞ？」

「……だったらどうすれば……」

オッサンは 「簡単さ」 と笑った

「死にたくなけりゃ 戦えば良いんだよ」

「でも」 それになおも食い下がる

「……諦めたりとか…しないのか？」

「諦める？」

「機体が動かなくなったりとかしたら……」

「なるほどね」 オッサンは苦笑の声を漏らした

「そうだったら アンタだって諦めるだろ！？」

オッサンは溜息を吐いた 駄々っ子に困った親の様に

「ボウズ 良い事教えてやろうか？」

「…良い…事？」

それに頷く 「聞きたい」 そう告げる

「戦いつてのは？もうダメだッ！？って所からが本番なんだよ」

その言葉の意味が分らず首を捻る

もうダメなら そこでもう終わりじゃないか

でもオッサンは それは違うと首を振った

「どんなに機体がスタボロでも 動くんなら戦う

戦えるなら勝つ　それが　レイヴンだ」

それに納得できなくて　口を開きかけたら

オッサンが言った　「警告音が鳴るだろ？」

機体があと少しで機能停止するトコまで行くと

コックピット中に警告音が鳴り響く　その事だろう

「……うん」

あの音は嫌いだ　もう　何も出来なくなるから……

「あの警告音が　ホントの戦いの合図だ」

でもオッサンは　自分の考えとはまるで正反対だった

思わず目を丸くして　素っ頓狂な声を上げてしまった

「……あ…合図！？　でも……」

「そっから本気を出せるようになったら一人前」

「本気………？」

意味が解らなかった　そこまでなったら　後は死ぬだけ

そこから本番だなんて　無駄な足掻きなだけじゃないか

そんな考えを見透かされたように オッサンが笑った

「なに笑ってんだよ！」

オッサンは 「わりいわりい」 と笑い混じりで謝罪の言葉

それに少し腹が立つ 何だか子供扱いされたみたいでムカついた

「今は解んなくとも 生きてりゃそのうち解るよ」

飄々としたオッサンの物言いに 毒気が抜ける

その感じが何だか懐かしい 既視感を覚えていた

不思議な安心感 いつの間にか腹立ちもなくなってた

「……そんなもん？」

「そんなもんだ」

「……そっか」

「そうだ」

ホントに 解る時が来るんだろうか……

「それよりも今は 腕を磨け」

不意にオッサンの真面目な声音に

思わず居住まいを正していた

「死にたくなけりゃ 強くなれ」

「強くって……どこまで？」

その質問に オッサンは言葉を止めた

何だか悩んでいるように感じられた

それもつかの間 オッサンは笑いながら

「ソイツらを軽く倒せるようになるまで」

さっきオッサンが破壊した赤と黒のＡＣを指した

「……コイツラを？」

「そうすりゃ 強くなったって証拠だ」

それはオッサンにしてみたら 冗談交じりだったんだろう

確かにコレを倒せりゃ強くなったって分かるだろうけど…

「コイツに目を付けられたら それは？イレギュラー？の証なんだと」

「え？」

「まっ 早死にしたくなかったら気をつけるんだな」

何事もやり過ぎない様に　そう付け加えてよこした

「…あの…そのイレ…何とかってなに？」

「あ？　ああ…それはな…」

オッサンは何故か照れくさそうだった

喋る言葉をどもらせながら　「強い奴の事さ」　と言った

一瞬　いつか聞いた言葉と　同じ言葉を思い出す

もう　2度と会えないであろう　あの人の言葉を

「ん？　どうした？」

「……何でも無い」

バレないように　目を擦る

不意に　小さくコールサインが鳴いた

自分のかと思っ見てみただけ違った

オッサンが言った　「悪い」

どうやら向こうの通信だったらしい

「どうした？　？ネル？」

続いて女性の声が聞こえた

「敵の反応の無い今のうちに 離脱して下さい」

それにオッサンは「解った」と告げて通信を切った

「……今のは？」

それにオッサンは得意げに答えた

「ああ ？ネル・オールター？ 最高の オペレーター パートナーさ」

「信頼してるんだ」

オッサンは照れくさそうに 「まあな」 と答えた

「それじゃ 生きてたら またな」

それに頷く 「…うん…また」

鈍色のACが背を向けて そして走りだした

「……必ず」

それから数年後 火星に別れを告げ 地球に下りた
？アリーナ？にも登録し 晴れてランカーになった

……そこで彼女に出会った

「初めまして」

彫像のように整った 氷像のように冷たい

「君の名前は？」

ニコリともしない 無表情で無感情な女性

「私はニーナと申します」

地球で出会ったこの女性が 最高のパートナーになるのか

「貴方が死ぬまでのお付き合いですが よろしくお願いします」

最悪のパートナーになるのか 今はまだ解らない

「……まあ……ヨロシク」

でも 願わくば——…

誕生日の夜

「…………おにいちゃん？」

それは 突然の出会いだった

12歳の誕生日の夜

外はどしゃ降りの雨

その日 帰らぬ父を母さんと待っていた

「必ず帰る」

それだけを言い残し 数年前父は家を出た

父の肩書きは科学者……だったらしい

確かに何かの研究をしていたのは覚えてる

でも それが何の研究だったのかは解らない

あの人は 何も教えてはくれなかった

部屋の扉も 堅く閉ざされて久しい

そんな父から いきなり報せが届いた

「明日 戻る」

たった1行の文

明日 つまり今日

そんな父の言葉を信じ

ただただ 待ち続けていた……

無数の雨粒と強風が窓を叩いていた

テーブルの上にはケーキが乗っていた

それは僕の12歳の誕生日を祝うケーキ

時刻は9時をとくに過ぎていた

だと言うのに母さんの料理には手を付けずに

帰ると告げた父を 母さんと二人で待っていた

「今日は風が強いわね」 母さんは言いながら

冷めた料理を温め直そうとキッチンへ消えた

僕はすることもなく 窓の外を眺めていた

無数の雨粒が窓にこびり付き 強風が窓を叩く

ガタガタと心を不安にさせる音を奏でている

申し訳程度に生えた木々を激しく揺さぶっている

だというのに 部屋の中は妙に静かだった

静かというのは語弊か 寧ろ空々しさがあつた

雨風の音は酷いのに 時計の音が嫌に耳に障る

その理由は分かつてた もしかしたら父は

今日も帰つて来ないんじゃないかと言う不安

そして諦念が 部屋の空気を重く虚しい物にしてるのだろう

母さんも僕と同じ事を考えているんだと思っている

料理を温め直すという母さんの行動が 心情を如実に物語っていた

恐らく戻ってきたら母さんは 「さあ 誕生日を始めましょう」 と

繕った笑顔で 寂しそくに言うだろう 帰らない父を思いながら……

でも 僕のそんな浅はかな考えは見事に裏切られた

不意に低い唸り声にも似たエンジン音

それに続き甲高い音 ブレーキ音だった

僕は椅子から飛び降りると 駆け出していた

母さんも気付いたのか キッチンから小走りで出てきた

玄関の扉を 母さんと二人で凝視していた

もしかしたらと思う反面 そんなまさかと考えていた

今まで音沙汰も無かった父が そんな今更帰ってくる筈……

「……ただいま」

ゆっくりと扉が開く 全身に雨粒を垂らしながら父は佇んでいた

目深に被った帽子からも雫が垂れ落ち 口ひげまで雨に濡れていた

顔には疲労の色を濃く滲ませていた 重い塊のような溜息を吐いた

記憶の中の父よりも 目の前の父は少しばかり痩せ瘦けて見えた

「……父……さん」

それ以上の言葉が出せなかった

誕生日に 約束通り帰ってきてくれた父に喜ぶよりも

本当に帰ってきたと言う驚きの方が僅かに勝っていた

なにより 久しぶりの父に何を言えば良いのか分からず

おかえりの一言を告げるのすら ままならなかった

父と目を合わせられず 視線を下げた時 違和感を覚えた

何だろうと首を捻る 父の着る薄茶のコートを握る手があった

父の後ろに隠れる小さな手 僕の手よりもなお小さい

不思議そうにその手を見詰める僕に気がついたんだろう

父は優しい声で後ろに隠れている子供に 出てきなさいと促した

姿を見せたのは 怯えた瞳で上目遣いにボクを見つめる小さな女の子

長い髪は雨に濡れて 顔や額や頬に張り付いていた

年は僕より少し下に見えた 小動物の様に震えていた

母さんはいつの間に取りに行ったのか

タオルを二枚持っていた 一枚を父に差し出す

母さんは膝立ちで 「いらっしやい」 と女の子を手招いた

女の子は父を見上げ 父はそれに頷いて女の子の背中を軽く押した

恐る恐る近寄る女の子を 母さんは優しく抱き留め 顔と髪を拭いた

「その子の名前は？リアン？」

帽子を母さんに預け 顔と髪をタオルで拭きながら

父は淡々と ロクな説明も無くボクに告げた

「ロウ 今日からお前の妹だ」

「……………はい？」

「……………おにい……………ちゃん」

その日から いつもの日常が一変した

「…り…アン？」

「…は…い…」

……………困った 僕はとっても困っていた

少し話しかけただけで泣きそうな顔になる

その顔を見て また何も言えなくなる

「お前の妹だ 兄としてしっかり面倒をみる」

説明も無いまま家族が増えて 説明も無いまま妹ができた

その事に 特に何も意見を言わない母 それが不思議でならない

「えーと……」

「……うう」

長くて深い溜息を吐く

何を話して良いのか解らない

それはリアンも同じなんだろう

何かを言いかけて 口を閉ざす

そしてまた口を開いて その繰り返し

なのに 僕から話し掛ければ泣きそうな顔をする

正直に言つと 僕は気が重くて仕方なかった

なかなか慣れない妹 この1歳年下の女の子を相手に

僕はどうして良いのか まるで解らないでいた

「……リアン？」

……でも何故か

「えーと なに？」

僕の服の裾を掴みながら

「…あ…う…」

トコトコと後について来る

「お兄ちゃん！」

リアンと過ごして 2年が経った

「起きろお！」

2年も一緒だと さすがにお互い慣れてくる

そして 慣れてみて解った事 それは……

「こらあ寝ボスケ！ 起きろって言ってるでしょ！！！」

リアンは とても元氣の良い女の子だった と言う事だ

「目 覚めた？」

リアンが寝ている僕の腹目掛けてダイビングヘッドを決める

腹を押さえながらのた打ち回る僕に 馬乗りになりながら

リアンは無邪気にモーニングコールをするのが日課だった

呼吸困難で臨死体験を毎日味わうのは正直どうかと思う

僕は荒い呼吸を呻き声と一緒に吐き出しながら

恨みがましい眼差しでリアンを睨む

当のリアンは首を軽く傾げながら

不思議そうに僕を見下ろしていた

「リ～ア～ン～!!」

「なに？」

「いつも言ってるだろ！ 起すんなら普通に起せ!!」

リアンは怒られているというのに

まるで意に介さず快活な笑い声を上げてる

「笑い事じゃな……って コラ 聞け」

リアンは僕に覆いかぶさりながら

ベットの上で足をバタバタさせる

「だから聞けって」

「うーん？ 聞いてるよー？」

人の話しも聞かず リアンは思いつきり抱きついてくる

溜息一つ もう良い 諦めました

抱きつくリアンの頭に手を乗せ 軽く撫でてやる

慣れてみて解った事 リアンは元気の良い女の子だった

……それと とても甘えたがりな女の子だった と言う事だ

そんな ドタバタした日常にも

いつの間にか慣れていた頃

「……………え？」

その些細な出来事は起きた

「開いてる…………？」

父さんの部屋の扉が 僅かに開いていた

今まで入るなと言われていたし

何よりドアには鍵が掛かっていた

その時 好奇心には勝てなかった

この部屋には何があるんだろう？

父さんは何の研究をしているんだろう？

色々知りたいと思う心が ドアノブに手を掛けさせていた

「…………へえ」

恐る恐る足を踏み入れ 手探りで部屋の明かりを点けた

父の部屋は 思っていたほど散らかってはいなかった

もしかしたら 母さんが掃除していたのかもしれない

そんな事を考えながら 部屋の中を見まわす

本棚には意味不明な本が沢山収納されていた

その蔵書の山を見まわしていると

資料だろうか レポートが目に入った

【被験体の術後と副作用について】

それが その資料の題名だった

「被験体？」

何かの実験だろうか？

パラパラと 数ページめくってみる

書いている事は やはり意味不明だった

【IMITATIONをPLUS化する事により

稀にはあるが 記憶障害を引き起す場合がある

これは 記憶を転移させた場合にも起こり得る事である

十分に注意して頂きたい

例外として ORIGINALならば耐える事が可能

これは フィリアルで実証済みである】

「イミテーション？ プラス？？」

まるで訳が解らない 何の事だ？？

次のページを捲ろうとした時だった

「ん？」

その資料の中から 1枚の紙切れが落ちる

「設計…図？」

それは恐らく ACのパーツのように見えた

まあ ACとMTの区別なんてつかないけどさ

その設計図を 少しだけ広げて見てみる

頭と腕と体と足がついている それしか解らなかった

その設計図の隅っこの方に 小さく何か書いていた

【Nine】

「Nine…ナイン…9？」

このACだかMTだかの名前だろうか？

「9?…変な名前…」

「誰だ？ 何をしている？」

突然の誰何の声に体が飛び跳ねる

扉の開く音を後ろに聞きながら

僕の体は彫刻の様に固まっていた

「……ロウ？」

「父…さん…」

僕の現状は言い訳できるモノではなかった

「ココで何をしているんだ？」

「あ…の…開いていたから…つい…」

シドロモドロの返答しか出来なかった

怖くて後ろも振り向けずにいると

「ココには入るなと言った筈だな？」

きつと怒られる　それも激怒だろうな

僕は目を閉じて振り返りながら頭を下げた

「ごめんなさい…！」

でも　予想に反して父は怒鳴る事はしなかった

「私の部屋には2度と入るな　解ったな？」

諭すように　静かな声で父は言った

そして僕の頭に手を乗せると　軽く叩いた

「……はい」

それに小さく頷くと　父は目を細めて僕を見た

「よし　じゃ　リアンの所に行ってやりなさい」

「…は…はい！ 言い付け破ってごめんなさい！」

怒られなかった安堵と リアンの名前で気が抜けた

僕の謝罪に父は小さく微笑んで 頷いてくれた

リアンが家族になって 数年が経った

「リアーン」

リアンがそこにいる

それが当たり前の日常

「おい 出てこーい」

それがこれからも続き

それが 変わらない毎日だと思っていた

…失うとは 思いもせずに…

「リアン………？」

…その日を境に リアンは 姿を消した…

「御願います！ 妹を…リアンを探して下さい！！」

「解った解った 探してやるから帰りなさい」

監督局に 探してくれるように頼み込んだ

でも 返る言葉は素っ気無いものばかりだった

話しもロクに聞こうとせずに 入り口で追い返された

「人探し？」

監督局が探してくれないんだったら

あとは レイヴンに頼るしかない

「お金だったら幾らでも出します！ だからお願いします！！」

「幾らでもって……おいおい」

お金さえ払えば 彼らはなんでもしてくれる

そう聞いた 確かにその通りだった でも…

「100000C 最低でも…だ」

「100000C?!」

数字と言う名の残酷な現実を

ただ 思い知らされたただだった……

「父さん！ 何でリアンを探そうとしないんですか！？」

何より不可解だったのが 父さんが探そうとしない事だった

まるで 初めからこうなる事を 予想していたかの様に……

「……リアンの事は 諦めなさい」

「諦める?! 何で!?!」

父の顔に浮かぶのは 諦念の表情

もうどうにもならないと 父は言った

「良いんだ これは仕方の無い事なんだ……」

仕方が無い その言葉に僕の頭は血で沸いた

良い訳があるか！ リアンは僕の妹だぞ!?

「フザケルナ!!」

父の胸ぐらを掴み 声を張り上げる

これが 僕にとっての最初の反抗

「何にも教えてくれないくせに 諦める!？」

勝手に連れて来て 何も話さず妹にして

いなくなったら諦める!？ 冗談じゃない!!

部屋を飛び出す それを引き止める父の声

「リアンの事は忘れるんだ お前が辛い思いをするだけだぞ!」

「ウルサイ!!」

そんな言葉 聞く気なんて毛頭ない

忘れる!？ 辛い思い!？ 何を今更!!

「それに…お前一人でどうするつもりだ？」

……僕一人？ それこそ 何を今更

手段なんて とうに決まっている

「この世で誰も リアンを探さないって言うなら」

きつとリアンは泣いている

寂しがりで甘えん坊のアイツは

心細くて泣いている筈だ だから………

「オレがアイツを 見つけてみせる」

協力者

風が流れ 草花が揺蕩^{たゆた}う

辺りは見晴らしの良い野原

時刻 14:25

既に日は高く 雲はゆつくりと流れ

時間もまた静かに ただ優しく過ぎていく

?ウイリア平原?

コルナートベイシティの程近く

シユ海沿いに横たわる広大な平原

そこには 見るべき物は何も無く

そのため 人の姿を見る事も無い

ただ続く平原 風と大地のみの空間

何処までも 何処までも続く

——否

平原の先 突然の断裂 巨大な裂け目

クレーター

唐突に 何の脈絡も無くポツカリと

不自然なほど突然に 穴が開いている

バロウズヒルにある？ギエンクレーター？

程では無いにせよ かなりの広さを有する

そのクレーターのほぼ中央で 光が数度瞬いた

そして何かの弾ける音 再び光 煙が尾を引く

4発のミサイルが目標に向かって飛来する

だが目標はそれを躲す ミサイルは地面に激突し爆発

クレーターの底 そこは今戦場と化していた

青色の逆間接ACが走る 走りながら右手の銃器を構える

EWG-BZ/SS55
バズーカを 4脚のACに目掛けて乱射した

4脚のACはそれを難なく躲す 逆に照準を合わせる

ZWG-RF/37
ライフルを構える 狙いをつける

そして 引き金を引く

3発の弾丸は 的確に逆関節ACに襲いかかる

右肩 左腕 左足 寸分の狂いも無く被弾

逆間接ACも 怯まずOBを点火

一気に間合いを詰めながら ブレードを振る - - - - -

よりも早く 4脚ACもまたOBで飛んだ

逆関節ACは誰もいない空間を薙ぐ

4脚ACは見事な機体操作で逆間接ACの背後を取る

だが不思議なことに 4脚ACは攻撃の好機に際して

ただ立ち尽くすだけ 逆関節のACに銃も向けない

まるで逆関節ACが自分に気づくのを待つかの様に

それは 露骨に手を抜いているのが窺えた

「どっちが勝つと思う?」

クレーターの淵に トレーラーが停車していた

その運転席に腰掛ける女性が笑みを浮かべて問いかける

トレーラーの隣に AC がしゃがんでいた

その機体の右手を 椅子代わりに腰掛ける少女が

くすくすと笑い声を交えながら応える

「……………賭けます?」

「良いわよ…………じゃあ私はコッチ」

トレーラーに乗る女性は素早く4脚のACを指さした

「…………あつ…………ずるい」

機体の右手に座った少女は

頬を膨らませて非難の目を向ける

「じゃあ 私は……………」

少女は渋々逆関節のACを指さし

「コッチ…………?」

少女の疑問形に トレーラーの女性は吹き出した

「はい 賭けは成立ね それじゃあ何を賭ける?」

「……うーん…夜ご飯…とかどうですか？」

「……別に良いけど それ誰が作るの？」

少女は無言でトレーラーの女性を指差す

「……ちょっと…それ賭けになってないんじゃない？」

指さされた女性は 苦笑を浮かべて抗議した

「……と言つかですね」

少女は視線をクレーターの底に向ける

トレーラーの女性もつられて視線を移した

そこには あたふたと4脚ACの姿を探す

逆関節ACの少し情けない姿があった

「初めから 賭けににならないと思うんですけど……」

少女は苦笑いを浮かべつつ 酷い事を言つてのける

女性は何も言わずに困った顔で苦笑を浮かべていた

「否定はしないんですね リサさん酷いなあ」

少女はトレーラーの女性に笑って冗談を言った

リサと呼ばれた女性は　さも心外と言う顔

でも口元にはイジワルな笑みを浮かべながら答えた

「あら？　アナタよりは優しいつもりよ？」

ロックオンマークが揺れる

4脚のACを捕らえようと必死に動く――

だが　捕らえる寸前で4脚ACが視界から消えた

「ああ！　クソッ！！」

すぐさまレーダーに目を向ける

こっちの右側　距離は200

「そこッ！」

右手のバズーカを構える　撃つ

「なッ！？」

銃撃と同時に突然機体が激しく揺らいだ

その衝撃で機体は体勢を大きく崩した

何とかたたらを踏みながらも踏ん張る

頭の中で状況の整理を試みるが追いつかない

多分 今のはミサイルを撃ち込まれたんだろう

それだけは何とか理解することが出来た

すぐさまレーダーで周囲を確認する

赤い光点が接近するのが見えた

「ヤベッ！！」

またしてもミサイルが迫っていた

4脚ACはOBで移動する瞬間 ミサイルを放ったらしい

しかもご丁寧に 時間差で直撃するように計算して

「このッ！」

歯を食い縛り迫り来るミサイルをなんとか回避

だがレーダーに 凄まじい勢いで接近する光点が映る

今度はミサイルでなく 4脚ACがこっちにてスッ飛んで来た

バズーカを構える 相手に向けて狙いを定める

ロックオンマークが相手を追う——追いきれない!!?」

「えっ!?!」

4脚ACはこっちの脇を抜け 背後へ消えた

慌てて機体を旋回させるが後ろにも姿がない

再び衝撃が機体を襲った 後方から体当たりを食らう

背後に回られ機体を旋回させたが更に背後を取られていた

前屈みに倒れるのを間一髪の所でなんとか持ち堪え………

いきなり目の前がブラックアウト

「えっ!?! えっ!?!」

訳も解らず慌てふためいている隙に

今度は逆に 背中から倒れこむ

どうやら 頭部を掴まれながら

後ろに叩きつけられたらしい

目の前に 四脚の機体が覆い被さる

右肩 左肩 右足を踏みつけられる

さすが4脚 脚が多いのは伊達じゃない

最後にコアへ銃口が押し当てられた

「これでチェック」

モニターに映った見なれた顔が

不敵な笑みと共にそう告げる

思わず深い深すぎる溜息を漏らす

「また負けた……」

全戦全敗只今記録更新中

いい加減 泣くぞ

「おい ダイジョーブか？」

心配してますってセリフを笑いながらよこした

「全ッ然大丈夫 ケガする暇なんて無えもん」

ふて腐れた声で 応えをかえしてやった

「そーか そりゃ良かった」

男の顔がニヤニヤと笑みを浮かべていた

ホント この人腕は良いのに性格悪いよな

今まで模擬戦に付き合ってもらって解った

この人 メチャクチャ強い つーか 強過ぎ

「マスター ホントに強いよなあ……」

マスターはオレの正直な賛辞に だが鼻で笑った

「オメーがまだまだ弱いだけだったの」

「わーるかったね どーせオレは弱いですよッ！」

ボロクソに言われて悔しくて頭を掻き毟った

それをマスターは やれやれと苦笑いを浮かべている

「はいはい そう怒るなっ」

不意にマスターの表情が変わる

急に真面目な顔をしながら

「でもな 俺に勝てねえようじゃ

あの子守るなんて到底無理だぞ？」

思わず口籠る 二の句が告げずにいた

「わ…解ってるよ…そんな事…」

オレ自身が嫌ってほど知ってるっての
痛い所をマスターに突かれたのと

自分自身の弱さに少しイライラしてた

そこに小さくコールサインが鳴いた

『お疲れ様　ロウ』

昔と変わらず快活な笑顔を見せていた

今話していた少女——守るべき女性_メ

「……リアン」

- - - - 1年前

リアンが失踪して　4年が経過していた

見るべき情報は皆無　合うべき人も無意味

オレの中で　諦めが支配しそうになっていた時

最後の頼みとも言つべき情報が　手に入る - - - -

「…そこ曲がって…そうその奥…下に - - - -」

「ああ解った サンキュ」

曲がりくねった道を歩く とんでもなく解り辛い

裏路地に面した通り 治安は…恐らく悪いだろう

うってつけと言えば まあ そうなのかもしれない

教えられた場所がそこにあつた

階段もある 多分ここで正解

でも本当に合ってるのか？

不安が過る 少しだけ逡巡する

一度大きく息を吸って そして吐く

ボサツと立てても仕方ない

意を決してゆっくり階段を下りる

靴音が鳴り響く 心臓が高鳴る

やっぱり緊張してるみたいだ

最後の階段を降りる

入り口の扉には白いプレートが掛かっていた

【OPEN】

店はどうやら開いているようだ

息を飲んで 目の前の扉をゆつくりと押し開く

薄暗い店内を 1歩1歩進んでいく

「……………いらつしゃい」

唐突に掛けられた言葉に体が跳ね上がる

声の主はカウンターの向こうでグラスを磨いていた

この店のマスター何だろう 背の高い男がそこにいた

「…………… なんだガキか」

「なッ!？」 頭が一瞬で沸いた 「ガキって…!!」

でも 男はオレの怒りなんて鼻で笑い飛ばすと

「ガキはガキだろ…………… 何しに来た？ ミルクは無ねえぞ？」

何だコイツ！ 何て口の悪い野郎だ！

食って掛かりそうになるのを理性でどうにか抑えこむ

「…………… んなモンいるかよ… 代わりに情報くれ」

男を睨みつけながら言うと 男は首を捻った

「ああ？ 情報？ なに言ってるんだオメエ？」

「トボケんな！ アンタが腕の良い情報屋だって言うのは知ってるだ！」

男は何が面白いのか ニヤニヤと笑みを浮かべていた

「…情報屋…ねえ」

その段になって 不安が沸々と沸き上がってくる

確かにここだって聞いてきたけど 確証は無かった

藁にもすがる思いだった でも もしデマだったら……

「……違う……のか？」

「さあ？ どうだろうな？」

男は腕を組みながら 馬鹿にしたような笑み

完全に遊ばれてる おちよくられていた

頭にキてカウンターに詰め寄り叫んだ

「答えろよ！ アンタが情報屋なんだろう?!」

だが男は動揺も無く 身動き一つしない

逆に値踏みするような視線を向けてきた

「なんでそんなモンを欲しがる？」

男は笑みは浮かべたままに

だが探るように問い掛けをよこした

「アンタが情報屋じゃないなら関係無いだろ！」

頭に血が上って 当初の目的を見失っていた

それを男は 「落ち着けよ」 なんて事を言いやがった

「まあ良いから言ってみ？ 俺が情報屋なら力貸すかもヨ？」

「……ホントかよ？」

「さあ？」

男はまた 嫌らしい笑みを浮かべていた

ホントに信用して大丈夫なのか？

更に激しく不安が増してくる

短い時間 頭をフル回転で考えた

考えた結果　もう頼る道がここしかなかった

オレは嫌々ながら　自分が情報を欲しがる理由を語った

「……………義妹を……………探してる……………」

腕を組んだまま　男はジッとオレを見ていた

その目をオレは　正面から睨み返していた

暫くして　男の表情と雰囲気が変わった

「座れ」　男はカウンターの席を示した　「話してみろ」

オレは言われるままに席に座り

男に今までの事情と理由を話した

「そうか　ここにも似たようなバカがいたか……………」

バカって何だ?!バカって!

オレが文句を言ってやろうと

椅子から立ち上がろうとしたら

頭を抑えられて強引に座らされた

男の右手を掴んで頭から退けようとしたけど

信じられないくらい男の力は強かった

両手で力一杯抵抗しているのに

男の右手一本引き離す事が出来なideいた

「お前 幾ら持つてる？」

急に男が手を離したせいで

危うく椅子から転げ落ちそうになる

虚空でバタバタと手を振り回して

何とか体勢を戻そうと頑張っていた

だけどオレの努力は無駄に終わりそう

オレは多分 このまますっ転んで……

と思ったら男がオレの右手を引っ張った

「お……で……え？」

「金だよ 金 情報はタダじゃ無えんだぞ？」

金？ え？何で？ 情報って……？

頭の中に意味が入ってくるまで数秒掛かった

次にその意味を理解するまで更に数秒を要した

そして完璧に理解してからオレは男に叫んだ

「やっぱアンタだったんじゃないか！」

男は そりゃもう良いんだよと言って

オレのオデコを指で弾いた

結構痛かったのと色んなので

目に涙が浮かんできた

それを悟られないように

男から視線を逸らしてぶつきら棒に言い放つ

「金はある」

横目で男を見ると やっぱり意地の悪い笑みを浮かべていた

「幾らまで出せんだ？」

極力男と視線を合わせないようにそれに答える

「……100000cまでなら」

男は少し驚嘆した その後で失礼な事をほざきやがった

「親の金？」

「違う！ 自分で稼いだんだよ！」

オレの言葉をまるで信じてない

「どうやって？」

それは男の目が如実に物語っている

だからオレは 自分の職業を告げた

「……レイヴンになっただよ」

男は今度は目で見て分かるほど驚いた

「その歳で…か」

「……悪いかな？」

この男もオレをガキ扱いすると思った

事実 オレは戦場で結構馬鹿にされた

ロートル共がオレの事を鼻で笑い飛ばし

足手まといは死ねと言われていた

でも男の反応は他の奴と全然違っていた

「悪かねえよ それは義妹のためか？」

「当たり前だ」

「——OK 気に入った 調べちやる」

「調べるって……」

「あん？ 情報欲しいんだろ？」

「本当……に？」

あ…ダメだ…嬉しくて気が緩んでいくのが分かる

「ああ 力になれるかは解らねえけどな」

力になってくれる その一言でもうダメだった

「………ありが…」

嬉しくて涙が止まらなかった

そんな顔を見られるのが恥ずかしくて

顔を上げられなくて俯いていた

「気にすんな 商売だからな」

そんなオレを マスターは見ないふりをしてくれていた

初めての協力者が嬉しかった
もうオレは一人じゃない
- - -
- - -

微笑みの裏側

磨き終えたグラスを置く

次のグラスに手を伸ばし磨く

置く 磨く それを繰り返す

ガラスの擦れ合う甲高い音

グラスを磨く音が鳴っていた

「―――：そろそろか？」

時刻はまだ 午後16：30

開店には早すぎる 人がいないのも頷ける

店はまだまだ準備中 客は来る筈も無い

だが そんな開店前の店に向けて

凄まじい速度で階段を駆け下りてくる足音

「マスター！ 来た？！」

続けて威勢良く叫び扉を開け放った

飛び込んで来た男が一人 ロウだった

店のマスターは深いため息を吐いて

「ロウ 頼むから入り口は壊さねえでくれよ？」

「あつ ゴメン」

ロウが毎日勢いよく扉を開けるせいで

最近開け閉めする時に甲高い音を鳴らすのを

マスターは少しだけ心配していた

そろそろ壊れるかもしれないな と

当のロウ本人は全力疾走してきたせいか

呼吸も荒く 肩で息を切らしていた

それ以上に逸る心を抑えられないでいた

深呼吸をして 唾を何度か飲み込んでから

「それで！？ どう！？」

「まだ来てねえよ」

新しい情報は来ているかとロウは問い

それにマスターはグラスを磨きながら

素っ気なく返事をした

「そんなガツカリした顔すんなって」

極端な表情の変化を見せるロウを

マスターは苦笑をもって見ていた

「そんな簡単に見つかるんだったら

オメエだって苦労はしてねえだろ？」

マスターはロウの目の前に水の入ったグラスを置く

「サンキュ」

ロウはグラスを受け取ると喉を鳴らしながら一気に啣る

「美味しい！」と言って カウンターにグラスを置いた

「それに もしかしたら地球にはいねえのかもな」

マスターの一言に ロウの動きが止まった

地球にいないと言われ その言葉の意味を考え

ロウの頭の中では最悪な結末が想像されていた

「……………それってどう言う……………」

ロウはその答えを聞きたくなかった

もう生きていないなんて言っただけじゃなかった

水を飲んだばかりなのに喉をカラカラに枯らし

冷たい汗を背中に流していた

「ん？ ああ…もしかしたら火星にいるかもってな」

想像と全然別な答えにロウは全身の力が抜けていた

倒れこむように椅子に座り込むと 乾いた笑いを上げた

「……火星ね…そうそう…火星が…」

そんな拳動不審なロウに マスターは首を捻った

「……ああ　ありゃデタラメだ」

「デタラメ?!　ウソだろ!?!」

「実際やったのはジオ社だよ」

他愛も無い雑談　地球政府の現状がどうか

最近起きた事件どうか　そんな話で盛り上がっていた

今は この前のバレーナ社襲撃についての話し

「でも 襲ったのはエムロードって話しただけど……」

マスターは鼻を鳴らして笑い飛ばした

「そりゃアイツらお得意の情報操作ってヤツだ」

そして皮肉たつぷりに吐き捨てる

「正規の情報を乗せ換えて流す いつもの手」

マスター曰く

この手の情報攪乱は 多かれ少なかれ

幾度と無く行われてきていることらしい

他企業が他企業へ罪を擦り付ける

弱みを見つけて大げさに流して叩く

地球政府も例外じゃ無いと教えてくれた

「じゃあ正しい情報ってのは……」

「まずあり得ねえな」

マスターはハッキリと断言した

残念ながら 今の世の中正直者は少ないらしい

「……それじゃどうやって見分けんのさ？」

誰も真実を語らない 流されるのは虚構のみ

これじゃ 素人は聞いたくらいじゃ解らない

「見分け方ねえ そうだな……」

マスターは視線を上に向け 少しだけ考えてから

「んなモン簡単さ」

マスターは人差し指を1本立ててみせた

「1つはな 自分の目と耳と判断力」

「——って 当然だろ？ そんなの？」

何を教えて貰えるのかと期待してたのに

帰ってきた答えがそれで 少し拍子抜け

それにマスターは「でもな」と続けた

「その当然が出来ないヤツが結構いんだよ」

しかも騙す側もそれを承知で二重三重と偽装する

だから真実なんてのは見えづらいたよと言った

それに「なるほどね」と相槌を打つ

マスターは指を2本立てて言った

「んで俺達みてえな情報屋これが2つめだ」

虚構から事実を探し事実から真実を掘り出す

それが自分の仕事だと笑いながら言ってみせた

「言っねえ」

あまりに自信たっぷりに言うマスターに

オレは苦笑交じりに感嘆すると

「当然だろ？」

当たり前だとマスターは言っただけだ

気がつけば結構な時間話し込んでいた

今日もリアンについては収穫なしだったけど

代わりに色々と裏の話しが聞けて面白かった

「さて そろそろ帰るわ」

軽く伸びをして椅子から立ち上がる

「ん？ ああ そうか」

マスターもグラスを磨く手を止めて

時計に目を向けて小さく呟いた

「なんだ もうこんな時間か……」

「時間が経つのは早いつてね」

「まあな……にしてもオセエなあ」

マスターは軽く相槌を打ったが

別な事に気を取られてる風だった

「ん？ 誰か来るとか？」

この店はマスターしかいないと思ってた

実際この店に通い始めて何日か経ったけど

マスターの姿以外は見たことがなかった

「ああ ちょっと買い出しにな」

買い出しって事は 客って訳じゃないのかな

「ふーん だったら探してこよつか？」

どうせ帰っても 明日の準備するくらいだし

顔とか特徴教えてくれれば その辺探す位は出来る

オレの提案に でもマスターは首を左右に振った

「いや もうちょいしたら俺が行ってくる」

「そつ 解った それじゃ」

まあ マスターがそう言うんだったら良いか

酒代をマスターに渡して別れを告げた

軽く手を振って入り口の扉を開けようとした時

「……ん？」

外から何だか妙な足音が 凄まじい勢いで迫ってくる

不審に思いつつも ドアノブに手をかけた瞬間……

突然店のドアが勢い良く開け放たれる

それに巻き込まれて尻餅をついた

何かと見上げると 入り口に一人の女性が立っていた

呼吸は荒く 肩で息を切らしている そんな彼女と目が合った

数秒の沈黙の後 その女性は驚きからか恥ずかしさからか

どっちか知らないけど大声で悲鳴を上げた

次の瞬間 マスターが何かを叫んでた

「待て！ソイツは――――ん」

オレはその声を左耳で聞きながら

右側頭部に衝撃を受け

そのまま昏倒した

「それじゃ 後は頼む」

「――――ん」

二人の男女の声が聞こえた

でもそれが誰なのか分からない

後は時計の音しか聞こえなかった

「…………え？」

瞼を上げて 瞬きを数回繰り返した

どうやらオレは ベッドに眠ってたらしい

目に飛び込んできたのは 一面白の天井だった

…頭がボーっとする…

まあ とりあえず まずは落ち着こう

慌てるのはそれからでも遅くは無えだろ

ハッキリしない頭で思考を巡らす

何事も現状認識は基本……

「痛ッ！」

右側頭部の痛みが思考作業の邪魔をした

ってか何でこんなに激痛走ってんの……？

……あーと…なんだっけ……？

なんかされたよな……確か……えーと……

…マスターに勘定して…店出ようとして…

「OK ココまでは憶えてる」

で 次は確か ドアがイキナリ開いて 尻餅ついて

そしたら女の人を立てて 悲鳴聞こえて……

……で……蹴り？

「……そうだ…蹴りだ…」

女の悲鳴聞こえて イキナリ蹴られたんだ

多分ローキック 右のコメカミの辺りに食らった

「……なんじゃそら」

有り得ねえだろ…何でいきなり乱入した女に蹴られんだよ

思わず口をついて出た呟きを 聞いている人間が居ると思わなかった

「……あら？ 目覚めた？」

ちよつと驚いて体が跳ねる

ベッドの脇に女が座っていた

肩まで伸びたウェーブの掛かった髪

掛け慣れてるんだろうか 眼鏡が妙に似合う

落ち着いた雰囲気 理知的って言葉がピッタリだ

歳は25歳位にも見えるけど それ以上にも見えるし

でも もっと若くも見える 不思議な女だった

その女を観察するように凝視してたせいだろう

女は首を傾げて言った 「なに？ どうかした？」

確かに綺麗系の女だけど 別に見惚れてた訳じゃない

オレがその女を見てた理由は別の所にあった

「どうしたの？」 と覗き込んできた女に向かって

オレはボソリと呟いた

「……キツクの鬼」

「誰がよ」

女は言うつと 鋭いツツコミと平手打ちをかましてくれた

見事な一撃だった 完全な死角から鋭角に頭を叩かれた

「イテッ」 オレが恨みがましく女を見上げると

「あら？ 大丈夫？」と 女は人事の様に言つてのけた

「……あの…痛えんですけど」 頭を摩りながら訴える

「そう？ 例えば？」 女は足を組んでにこりと笑った

「強いて言うなら頭全体」

「頭が悪いの？」

「ふざけんな アンタに蹴られたトコだよ」

「ああ あれね 不可抗力よ」

シレつとした顔で女は言った

「不可抗力で人の頭狩るのかよ」

オレは自分の正当性を訴えたが 女は鼻を鳴らして一蹴した

「あら 女性を下から舐める様に見上げる方が悪いと思わない？」

……舐める様について……

「それこそ不可抗力だろ アンタがイキナリ突ッ込んでくるから」

「…ああ…そうだったわね ごめんなさい」

意外なほどあっさりと 女は謝罪の言葉を述べた

もしかしたら 結構サッパリした性格なのかもしれない

「……まあ…別に良いけど」

何だか肩透かしを食らった気分で拍子抜けした

急にそんな下手に出られるとオレとしてもどうして良いやら

口ごもりながらオレが言うと　女は柔らかい笑みを浮かべた

「そう？　ありがとう」

照れくさくなって思わず女の顔から視線を外した

そんなオレの反応を見て　女は悪戯っぽく笑む

「……ところでさ」

ペース握られまくりでなんか悔しい

どうもこう言う自分を知ってる女は苦手

溜息混じりにオレは一つの質問を女に投げた

女は「ん？　なに？」と首を小さく傾げた

「ココ　どこ？」　オレは指で真下を指してみせた

「えっ？　ドコって…店の裏よ？」

……店って……ああ…マスターのどこか

「家から店まで歩いて2分 便利でしょ？」

それって 単に繋がってるだけなんじゃ……

ジト目で女を見つめ そして溜息を吐いた

「オーケー それは解った…で 次の質問」

「はいはい どうぞ」

どこか楽しんでる雰囲気醸し出す

そんな目の前の女を見つめてやる

うん 確かに綺麗だ 確かに綺麗なんだけどもだ

「……アンタ…誰？」

いや 何気なくフレンドリーに会話してるけどもさ

よくよく考えたら 思いつきり初対面な訳で……

「そっか」 女は何が面白いのか声を出して笑った

「私の名前はリスティン・サーシャ 長いからリサで良いわよ」

愛称でリサつてのに違和感を覚えたが 深くはツツコまなかった

まあ 本人がそれで良いって言うてんだから良いんだろうな……

そんな益体も無い事をボーっと考えていたら

「ところで　ロウ君？」

「え？！　あつ…なに？」

「頭大丈夫？　まだ痛むとか無い？」

リサって名乗った女が心配そうに気遣う

でもそれ以上に違和感が気になった

「…あ…あぁ…頭は大丈夫だけど……」

そこで言葉を一拍置いて　「名前……」

「名前がどうかした？」

「オレ教えてなかったよな？」

「そうだったかしら？」

リサさんは首を軽く傾げ　考える仕種をする

「確かに言ってるねえよ　なんで知ってるの？」

少しだけ警戒しながら聞くオレに

リサさんは当然とばかりに告げた

「なんでって あの人から聞いてたからだけど？」

「あの人って？」

「貴方がマスターって呼んでる人」

「……そりゃそうか」

普通に考えりゃ分かりそうなもんだよな

マスターの店に居るんだからそりゃそうだ

当たり前の事に深く納得しているオレを

リサさんは優しい眼差しを向けて言った

「リアンちゃん 見つかるの良いわね」

「……全部 聞いてんだ」

「普通は教えてくれないんだけどね」

さっきまでの警戒心はとうに消えていた

多分この人もマスターの仕事に関係してんだろ

でなきゃよっぽどマスターに信用されてるかだ

「あの人に任せておけば大丈夫よ」

リサさんの顔には 優しい微笑みと信頼の色が見えた

「解ってるさ」 その言葉にオレも深く頷く

リアンを一緒に探してくれる人はマスターだけだった

あの人はまだ一度も リアンが死んでるとは言わない

「それにね」 リサさんが言った 「あの人喜んでたわよ」

「似たようなヤツがいたってね」 彼女は心底楽しそうだった

確かにマスターに言われた覚えがあつた

ここにも似たようなバカがいたか

あれってどう言う意味なんだろう？

「似たようなって なに？」

オレの問いに でもリサさんは唇に人差し指を当てて

「ナイショ」

「うわっ ブリイー」

不満を口に抗議の声を上げるが リサさんはどこ吹く風

悪戯っぽく笑って 「何がずるいの？」 って聞いた

「オレの事は聞いたんだろ？ だったら少しくらい教えてくれてもさ……」

ブツブツと文句を言いながら遠まわしに強請ねだると

「……少しだけよ？」

根負けしたりサさんは溜息を吐いた

「……あの人と私 幼馴染なのよ」

「幼馴染？」

「そつ 腐れ縁とも言っわね」

リサさんは小さく笑った

「それで昔 ちよつとした事件があつてね

その時に助けてくれたのが彼だったの」

幼馴染で 事件に巻き込まれて 助けた

なるほどね 確かに少しオレと似てるかも

「それって どんな事件だったの？」

聞いてから 少しマズッたと思う

気遣い足りなかったんじゃないかと

「うーん 誘拐……かな？」

でも本人は気にした風はなく答えちゃくれたけど

「誘拐？」

「そっ」

あっさり言ってるけどさ それってかなり大変な事なんじゃない？

そう言えば リサさん助けただってことはもしかしてマスターって

「レイヴンだったのよ ? 元? だけどね」

リサさんはオレの疑問に先回りする形で答えてくれた

「引退したとか？」

リサさんは 少しでも表情を曇らせて言った

「あの人 死んだの」

リサさんの言葉の意味が理解できなかった

噛み砕いて良く考えても やっぱり分からなかった

首を傾げて 「どう言う事」 って聞いたらリサさんが

「記録の上では死んだ事になってるのよ 私のせいでね」

……記録の上？

じゃ 公式には既に死んでるって事？

それもリサさんのせいで？

「なに？ どういう事？」

頭は既に大混乱 リサさんが何を言っているのか理解不能

答えを求めてリサさんに聞いてみたけど 「ごめんね」

「ココからは本当に内緒」

リサさんの顔は微笑んでいたけど

それ以上の質問を許さない雰囲気があった

「そっか」 リサさんに頷く

「解った これ以上は聞かない事にするわ」

まあ オレが聞けた義理でも無えしな

「そうそう」

リサさんはクスクスと冗談交じりに言った

「イイ男はね 女性の過去を問わないものの」

「……何それ」

「貴方がイイ男だって事」

「……そりゃどーも」

結局最後まで ペース握られっぱなしかよ……

- 獣 -

着弾 爆発 そして消滅

時刻 0 : 5 5

白色の閃光 2発の光弾

― バロウズヒル ―

漆黒の砲塔 獣の如き咆哮

― グリーンケイブ ―

「誰…か…たす…け…化け…物…」

咳き込み 血を吐きながら 必死の命乞い

手足は吹き飛び 血が溢れ 流れ 滴る

― 地下洞窟 内部 ―

無数の骸と鉄屑

凶々しき 四つ足の獣

動く物の無い 深き墓穴

獣の青い爪が ACを岩肌に礫る

ブレードをコアから引き抜くと

鉄屑と化した機体を無造作に投げ捨てた

- - - - - また一つ 骸が増える

鉄の骸から這い出る影一つ

「…あ…あ…」

小さな悲鳴を 男は上げた

見ている方が哀れと思う程 青ざめ 震え

「頼む！ 助けてくれ！」

そして 救いを求める 己が命を乞う

「もう2度と手は出さない！ だから - - - …」

何も語らぬ 無機質な獣

ただ静かに 右手を伸ばし――

「…頼む…助け…イヤだ…イヤだアア！！」

引き金を 引いた

静寂の空間に 2人の男が居た

「……なあ マスター」

「……うん？」

ちなみにロウは いつもの如くフライングで入店

準備中の店内で 難しい顔をしながら首を傾げていた

「どうした？ さっきから変な顔で」

「誰が変な顔だよ……じゃなくて」

この頃 ある事件が頻繁に起こっていた

事件と言つにはありきたりではあるが

その事件は つい昨日も発生した

バローズヒルの方で起きていた

「なんか 潰されてね？」

「……ああ」

この数ヶ月の間で 武装組織の幾つかが

立て続けに壊滅させられる事件が起きていた

壊滅 - - - つまり生き残りは皆無

襲撃犯は未だに不明であり

影すら浮かんでいない状況だった

ただ 幾つかの痕跡を調べた結果

1体のAC それも 四脚の機体ではないか

推測の域は出ないが それだけが解つたらしい

と言ったものの 今の世の中ACは珍しくなく

4脚乗りなど それこそ腐るほど存在している

「……なんだ 知り合いでも巻き込まれたか？」

グラスを磨く手を止めず マスターはロウに問う

「まさか」 ロウは頬杖をついたまま首を左右に振った

「んな物騒な知り合い いねェし」

「- - - - そりゃ良かった」

「お陰さんでね……それよりもさ」

ロウは携帯端末のニュースサイトを見ていた

そこに記載された件の^{くだん}記事を指さしながら

「この 襲撃者一人ってホント？」

「さあ？ 政府がそう言っただろ？ だったらそうなんじゃねえの？」

オールド・アヴァロン監督局の公式発表とはなっているが

政府も真面目に襲撃犯を探しては 実の所いなかった

どちらかと言うと 感謝しているくらいだった

実際 今回一番美味しい思いをしたのは

他でもない 監督局なのだから

誰の手も汚さず 誰の身も傷つける事無く

インディーズの軍事拠点を接收できたのだから

監督局は棚ぼた的结果に大喜びしていた

「この情報が正しいかどうか 解んねエだろ？」

正しい情報は流れない そう言ったのは

誰であろう 目の前のマスター本人だった

当のマスター本人は素知らぬ顔をしていた

「人を疑っちゃあイケねエなあ」

クソ真面目な顔で何を吐^ヌかすか

ロウは心の中でマスターに毒づいた

「……マスター」

「あん？」

「前と言ってる事 違う」

「そうか？ 気のせいだろ？」

口笛でも吹きそうなほどの軽口に

ロウは「これだから」唇を尖らせた

「大人ってズリィーよな」

「ウルセエよ」

ロウは肩を竦めながら 手の中のドリンクを飲み干した

こうして今日も のんびりと一日が過ぎようとしてた

だが この平凡な毎日が気に入らないとロウは嘆いた

「別に良いんだけどさ 身入りがなあ……」

「金欠か？」

「うーん…と言うか依頼潰れちまったんだよなあ」

「依頼？」

マスターはグラスを拭く手を止める

「ああ 今回潰されたインディーズのどこ 守りの依頼あったんだわ」

「それで？」

「なんか知らねえけど レイヴン集めてるとか言ってるさ」

「その依頼 受けてたのか」

「そゆ事 で いざ向かうとしたら イキナリこーなっちまった
だろ？」

マスターは頭を軽く掻いた 安堵にも似た表情を浮かべていた

「まあ 巻き込まれなくて助かったてのもあるけどさ」

それは事実だった 襲撃者にMT20体 AC10体が潰されていた
口ウがもし現場にいたなら 確実に鉄屑に変わっていただろう

「てーかさ このAC10体って 絶対ウソだよな？」

ロウが携帯端末から顔を上げ マスターを見上げる

だがマスターは何か考え事でもしてたのか上の空だった

「うん？ ワリい聞いてなかった」

ロウはどうしたんだろうと首を捻ったが

まあ 大した事じゃないだろうと話を続けた

「だからあ AC10体一人でヤツたとか言ってるけど 何かの間違いだろ？ これ」

ロウは どーせ噂の誇張かなんかで 実際は2〜3体だって

んでなきゃ 他に仲間がいたかのどっちかだろ そう考えていた

「ああ 確かにな もうちょい多かったと思う」

「だよなあ……あ？」

マスターの適当な返事にロウが眉を寄せる

この人はホントに仕方ねえなと苦笑した

ロウがツツコミを入れようと口を開く

だがそれよりも早く マスターが言った

「ロウ 他に別の仕事入れてるか？」

唐突な質問に ロウは目を丸くしたが

「1件だけあつけど…」マスターに答えた

「どんな？」

「いや どんって そりゃ言えねエって」

レイヴンにも守秘義務が課せられている

それはまだまだ新米のロウでも心得ていた

当然ロウは マスターの質問を拒絶した

だがマスターは なおもロウに食い下がる

「今回も 守るか？」

ロウは マスターの様子が変だなと首を捻った

元レイヴンならその辺の事情も心得ている筈なのにと

「依頼してきたの ? ヴォルフ?とか言うところだろ？」

「なんで知ってんの?!」

「やっぱりな……」

ヴォルフは最近急激に力を付けてきた新参の武装組織だった
どこかの企業が後ろ盾になっていると言う噂が囁かれていた

「コイツラも 狙ってる訳だ……」

マスターは 誰にともなくそう呟く

「……マスター？」

心配そうな顔でロウはマスターを見ていた

先程から話しかけても反応が無い時があった

何かを悩んでいる様な 物思わしい様子だった

「ロウ その依頼 断れねエか？」

「……はい？」

今度こそロウは啞然としていた

聞き間違えたかと頭の中で反芻して

やっぱり間違いじゃないと驚いた

「……断るって……そりゃ無理 前払いでもらってるし」

マスターは露骨に苦々しげな表情を浮かべた

「厄介だな」

舌打ちまでするマスターに

ついに不安にまでなったロウは

何とか理由を聞こうと問い質す

「どうしたんだよマスター？ さっきから変だぜ？」

だが マスターはロウの話しは右から左だった

また考え事を始めた男に ロウは恐る恐ると名前を呼んだ

「マスター……？」

「ロウ お前の機体の特徴は？」

唐突で意味不明なマスターの質問に

ロウは頭が追いついていなかった

「……え?! なに?!」

「だから お前のACの色とか 教えてくれ」

会話が飛びすぎてロウは足元の定まらない感覚だった

「機体の色は…」 自分の愛機を思い浮かべて 「青と白だけど」

ロウは答えた それにマスターは 「OK じゃ脚は？」

矢継ぎ早にロウへ質問を繰り返していく

「逆間接……」

ロウは機体の操作にまだ自信がなかった

だから安定性の高い鳥足 逆関節を選んでいた

それを見透かされて馬鹿にされるかと身構えたが

マスターはそんな事はどうでも良いとばかりに

どんどん次の質問へと移っていく

「青の逆間接ね…… 武装は？」

「武装って… 何でそんな事……」

「良いから」

マスターの有無を言わせぬ口調に辟易しながらも

ロウは聞かれた事に素直に答えていった

「あーと… 右手バズーカで 肩にミサイル積んでる これで良い？」

マスターは「オーケー」と頷いた「覚えとくわ」

次いで「その機体 変える予定は？」と言う質問に

ロウは「別に無えけど……」と答えた

「なんでんな事聞くのさ？」

ロウの問いかけに マスターは手を振った

「良いんだよ 気にすんな」

マスター本人は答える気がさらさら無いらしい

質問をするだけすると またグラスを磨き始めた

「何かあるの？」

「いんや だから気にすんなって」

ロウは心の中で不満を述べた

……何だっ てんだ……一体？

「……何……だっ てんだ……一体……」

ロウは呆然と その光景を眺めていた

MTがそこかしこで鉄屑に成り果てて

ACがそこかしこで物言わぬ棺桶と化す

人が原型を留めぬ程に焼け焦げて

辺りは焦土と化していた

男の悲鳴 「助け………!!」

断末魔の叫びは だが最後まで言えず

男の乗っていたMTは火柱を上げて爆発

操縦席は黒焦げに つまり男も炭化した

「……ちょっと待てよ……なあ……」

無線は混乱していた 状況はそれ以上に混沌としていた

「依頼人は!? 殺された!?!」

誰かがそう叫んだのを ロウは遠くに聞いていた

「……何の冗談だよ……コレ……」

人は自分の許容出来る範囲を超えた場面に出くわした時

知らずに笑いを上げるといいうが 今のロウがまさにそれだった

自分でも気づかないうちに 彼は高笑いを上げていた

それは彼の心が出来る最後の防衛であり 抵抗でもあった

ロウは地獄を目の当たりにしていた

人は斯^かくも容易く死ぬ生き物だったのかと

ロウはまるで本を読むように 他人事の様に眺めていた

「…ア…アイツは…化け物か?!」

ロウの他に依頼受けていたレイヴンが叫んだ

戦いに慣れた風の 戦場を見慣れた感じの男が

涙を流し 鼻水を垂れ流し 唾を吐き散らしながら

死にたくないと 生きていたいと命の懇願を続けていた

自分の命はこんなにも儚くて軽いものなのかとロウは嗤う

「生き残りは?!」 絶^{すが}る思いで誰かが叫んだ

だが それに答えられるほど余裕のある者はおらず

また 答えを待つよりも自分の目で数えた方が早い

ロウは 仲間の残りは8体だと誰かさんに教えてやろうとして

そのムダを悟った　その誰かさんは既に消し炭になっていた

… ああ… だったら7機か…

ロウは自分自身と目の前の惨劇を嘲笑した

受け入れたくないと彼の心が拒絶をしていた

酷く滑稽な光景　笑い話の様にさえ思っていた

… 何でこんな事になっちまったんだろう…

ロウは数分前の事を何日も前の様に思い出していた

始めは13体のACがそこに集められていた

広大な地下廃工場　そこは朽ちた穴倉

何故こんなにもACを集める必要があるのか

ロウは聞かされていなかった

実際にはロウ以外のレイヴンも知らなかった

興味を持つとすら思っていなかった

破格な報酬とそれに見合わぬ依頼の容易さ

この2つの条件に釣られて仕事を受けただけの

哀れで愚鈍な生贄に過ぎなかった

彼らが依頼人を前に話しを聞いていた時だった

突然現れた4脚のACに　だが誰も気に止めなかった

当然だろう　その場にいる者同士に面識は皆無

どうせ自分と同じように餌に釣られたんだな

その場にいた者達はその程度に軽く考えていた

目の前で依頼主が撃たれて跡も形も消し飛ぶまでは

ロウは何が起きたのか理解出来ないでいた

いや　思考はできていたのかも知れない

彼はこのACが何者なのかを漠然と把握していた

- - - - ああコイツが今噂になってるACか

黒をベースとした配色の4脚ACを呆然と眺めていた

肩にはグレネードランチャーとプラズマキャノン

よくそんな武装で動けるもんだ

そんな取り止めの無い事を　ロウは考えていた

動けなかったのは口ウだけではなかった

他の経験の浅いレイヴンも同様だった

そのまま動けなければ誰も動かなければ良かったのだ

そうすればそこで話しは終わっていたのかもしれない

4脚ACの狙いは 始めから依頼主一人だった

事を済ますと襲撃者は出口へと歩みを進めていた

現状を理解した者は胸中で肩を落としていた

せつかくの報酬が台無しだと憤る者もいた

その中に プライドの高いレイヴンが一人

ベテラン故だろうか 目の前で依頼主を殺され

自尊心を傷つけられたレイヴンが手を出してしまった

金目当てだった大半のレイヴンもそれに同調した

憂さを晴らす様に一斉に攻撃を開始してしまったのだ

彼らは負ける筈は無いと確信していた

多数の側が持つ優越感がそう思わせていた

絶対的優位を認識しているからこそその慢心

その中であって ロウだけは静観していた

正しくはどう反応して良いのか分からずに

手を出しあぐねていただけだったのだが

それが逆に功を奏したと言っても良い

ロウは4脚のACはもうオシマイだとも思っていた

襲撃者の背後から雨のように降り注ぐ弾幕

完璧な不意打ち 恐らく機体に穴を穿つだろう

そのまま無抵抗に蹴り殺されるだろうと考えていた

だが その考えはあっさりと覆されることになった

襲撃者は後ろ向いたまま 少しだけ機体を横に動かした

そんな ごく単純な動作だけで全弾回避してしまった

この時点で彼らは気づくべきだった 格が違いすぎると……

4脚ACは振り向くと 右手の武器を構える

滑らかな曲線を描く 名銃と呼ばれる兇器

レーザーライフル　？KARASAWA - MK2？

まるでドアをノックする様な気軽さで

4脚ACは2・3度　銃の引き金を引いた

KARASAWA - MK2独特の甲高い鳴き声が響く

それが戦闘の合図だった

4脚ACの反撃に逆上したレイヴン達は

あの無謀な愚者の首を取ると息巻く

我先にと飛び出して行った

後に残されたのはロウの乗る機体と

ベテランレイヴンが乗る機体だった

ロウは不思議そうに自分の前に佇む機体を眺めていた

最初に喧嘩を売ったクセに　最後に残ったヘタレ野郎

ロウは胸中で冷笑をそのベテランレイヴンに浴びせていた

だが　ゆっくりと機体が地に膝をついたのを見て合点した

ベテランレイヴンの乗る機体のコアに大穴が開いていた

—— ああ オレ達は手を出すべきじゃなかったんだ

ロウはこれでも多くの場数を踏んでいる

だから彼は経験と本能で理解していた

4脚ACは自分達が勝てる相手じゃ無い事を

ロウの目算はまさに的を得ていた

ACが1体 また1体と4脚ACに襲い掛かる

それを確実に 的確に ただ冷静に

寸分の狂いもなくコアのみを撃ち抜いて沈める

4脚ACは敵なのに ロウはその戦いに目を奪われていた

その様はまさに 寧猛を過ぎる4つ足の黒い獣

獣の持つ銃は咆哮 ブレードは爪であり牙だった

獣が吼える度に ACは鉄屑へと姿を変える

獣が牙を突き立てる度に ACは物言わぬ屍と化す

- - - - -そして気づいた頃には 残っているのは2体だけ

ロウの搭乗する機体と 軽量級の2脚ACだけだった

目前に迫る死　だと言うのにロウの頭は冷え切っていた

……オレってこんなに潔かったッけ？

現実逃避は己自身をも別の存在とみなしたのだろうか

戦闘中の軽量級ＡＣが近づいてきても　ロウは他人事だった

軽量級ＡＣがロウ機の右腕を掴んで引き寄せると　男は言った

「俺は死にたくないんでな　盾になってくれ」

「……………えっ？」

機体を引っ張られ　ようやくロウも現実に取り戻された

だが　その時には何もかにもが既に遅かった

迫る４脚のＡＣ　そしてＫＡＲＡＳＡＷＡ－ＭＫ２の光弾

軽量級ＡＣはロウを盾に使った

「退け！！」

４脚ＡＣの中で男の声がそう叫んだ

彼の頭は冷たく冷え切っていた　だからだろう

彼がその場に相応しくない思考を展開していたのは

「なんか聞いた事ある声だよな」

4脚ACから聞こえた声が妙に聞き覚えがあった

それが誰だったかを思い出す前に 次の言葉が浮かんだ

「やっぱりココで死ぬのかなあ」

現実を冷静に直視し 助かる筈も無い必中の距離だと得心した

そして最後に浮かんだ言葉が 「……………ムカツク」 だった

どこの誰とも知らない他人に 盾に使われた事に憤慨した

ロウの頭は沸いていた 冷えた頭が急激に熱を帯びていく

「……こんな所で……死ねるかよ……!!」

蒼白い光弾が目の前に広がる

誰も彼もがロウの死を連想した

4脚ACの男がロウの名前を叫んだ

——その瞬間 時が止まった

死を目前にして ロウは不思議な感覚を体験した

時間が圧縮されたような 刹那の時を悠久と感じていた

全ての事物が酷く緩慢で　苛立つ程に遅いと感じていた

呼吸は必定であるのと同じく　その事実を必然と捉えていた

本来ならば　見える筈のない速度で迫る光弾を

ロウはその双眸でハッキリと　目視していた

このままだと当たる　だったら　避ければ良いだけだ

機体を僅かに横に移動させる　ほんの１歩　右側に

すぐ真横を飛ぶ光弾を　ロウは目で追った

背後で爆発音　そして重い何かが崩れ落ちる音

ロウを盾にした軽量級の２脚ＡＣが　コアを食い破られていた

断末魔すら残せず　現実を理解する間もなくの死だった

「良い反応すりゃじゃねえか　肝を冷やしたぜ」

４脚ＡＣの男が笑いながら言った

ロウは震えながら　身動き出来なかった

逃げるか　それとも戦うかを逡巡していた

逃げれば後ろから撃たれるだろう

戦えば前から撃たれるだろう

どちらにせよ 生き残る可能性は無いと

「……ロウ？」

4脚ACの男は 不思議そうに問い掛ける

呼ばれた本人は 体を跳ね上げる程驚いた

何でオレの名前知ってんの？！

「俺だよ俺」

目を何度か瞬いて そしてロウは理解した

「……その声！ もしかして！？」

「話しは後だ さつさと帰んぞ」

4脚ACは振り返ると そのまま出口に走る

ロウも慌ててその後をブーストダッシュで追った

「ちょ……！ マスターと言う事さ！？」

間違いないとロウは確信した

彼は困惑の色を隠せないでいた

「話しは向こうでしたるから さつさと退散しよつや」

ロウも逃げるのには賛成だった

これだけ派手に立ち回れば

監督局は動かなねばならない

本人達は捕まえたくなくともだ

唐突に始まった喧騒は

唐突に消えて無くなる

静寂だけが そこに残された

「マスター 何でそんな強いのにレイヴン辞めちまったん？」

グラスの中身を空けながら ロウは首を傾げる

マスターはいつもの様にグラスを拭いていた

ロウの質問に彼は少しだけ拍子抜けしていた

てっきり何の為にヴォルフの連中を潰したのか

そうきかれると思っていたからだった

マスターは苦笑を浮かべてロウに答えた

「別に辞めた訳じゃネエけどな」

言い淀むマスターを見て　ロウも迷っていた

言えない事情があるのをロウは理解していた

だから深く立ち入るのを躊躇していた

だが　それ以上に理由を聞きたい欲求が勝った

ロウは言いづらそうに口を開いた

「リサさんは　自分がマスターを殺したとか言ってたけど……」

少しだけ驚いてマスターは目を丸くする

ロウも怒られるかと思って首を竦めていたが

マスターは溜息を吐くだけだった

「なんだ　聞いてたのか」

マスターは少し呆れ気味だった

いつの間にリサの奴は口が軽くなっただんだかと

それでもマスターは別段不快にも思っていなかった

別に隠すほどのモンじゃないと考えていた

ただ 情けない過去が少しだけ恥ずかしいと笑った

「リサに殺された訳じゃネエさ 俺が甘かっただけ」

マスターは昔を思い出し 自分の未熟さをロウに語った

敵を殲滅した後の安堵 そこに生まれた油断

増援なんて来ないと タ力を括っていたのも事実だった

だが 覆された現実 数機の旧式のACに囲まれる

どれもこれも同じカタチをしたAC 色も全て 赤と黒 - - - - -

そこで俺は そいつらに殺された事になってんのさ

マスターは自嘲にも見える笑いをロウに向けた

「.....それって リサさんと何か関係あんの？」

ACの戦闘で死んだと語るマスターに

釈然としないものを感じていた

リサさんが何か関係あるのか

そこでロウは思い出した

リサさんは言っていたと

誘拐されたんだと

「ああ ちよつとな」

今度こそ口を固く閉ざしたマスターに

ロウはそれ以上聞くことはしなかった

関わらない方が良い事もあるだろうし

手を出して欲しく無い事だつてあるだろう

部外者のオレが 気軽に聞いて良い話しじゃない

手の中のグラスを弄びながら ロウは自分に言い聞かせた

グラスの中の液体を一気に飲み干してた

少しだけ重くなった空気を払うように

一層おどけた風にロウは笑いながら言った

「にしても 勿体ねえよなあ そんなに強いのにさ」

マスターもロウの気遣いに気付いたのだろう

コイツなりに考えてんだなと 苦笑いを浮かべて返答した

「そりゃどーも」

ロウは空気を変える目的で話しているが

その意見自体は彼の本心でもあった

アレだけの強さを持っているなら

レイヴンにならななんて選択肢は無い

彼はそう考えていた

「もう一回レイヴンやったら？」

実際 あれだけの強さがあれば

依頼は引っ切り無しに来るだろう

ロウは そうしなよと言ったが

途中で変だなと首を傾げた

「依頼は受けてんのか？」

事実 マスターはレイヴンを辞めてないと言い

ロウの目の前で敵の群れを悉く駆逐してみせた

「アレだけ無茶してるんだし よっぽど大切な依頼？」

アレだけの敵の中に特攻がますって

どんだけ金積まれても オコトワリ

それを実行するって事はよっぽどの事だ

だがマスターは 少しでも困惑の表情を浮かべた

「うーん 依頼って訳じゃねえけどな」

「依頼じゃねーの？」

予想外の返答に ロウは目を丸くした

依頼じゃないなら趣味だろうかと眉根を寄せた

正義の味方に憧れてるのかと ロウは口を開こうとして

「…ああ…まっ 大切なヤツのためってな」

マスターの 笑みを浮かべながらも目は真摯だった

その言葉と態度に ロウはそれ以上言うのを止めた

依頼でもなく 仕事でもないのに体を張れる

ロウは1つだけ心当たりがあった

「大切な人って……リサさん？」

マスターは肯定も否定もせず

ただ 首を竦めて答えるだけだった

「…さあ…な」

似た者同士 なるほどね

ロウは胸中で頷いた

入り口の扉が甲高い音をたてて開く

マスターとロウは二人同時に視線を向けた

「ただいま」

マスターを見て 次いでカウンター席のロウを見た

「あら？ ロウ君今日も来てたのね いらっしやい」

軽く微笑みながら リサが扉をくぐる

買い物帰りだろうか 少しばかりの荷物を抱えていた

「リサさん 買い出しにでも行つてたの？」

ロウの問いかけに カウンターに荷物を置きながら

「そつ 今日の夕ご飯のね」

ロウも最近知った事だったが リサは料理が得意だった

意外だなとロウは思っていた 理知的な雰囲気を持ちながら

それでいて家庭的な一面も持ち合わせているリサの事を

人は外見じゃ分からないもんだと頷いていた

「ロウ君も食べてく？」

聞きようによつては失礼な妄想を働かせていたロウに

そんな事は知らないリサは笑顔でそんな提案をした

「えっ？ 良いの？」

ロウの顔が一瞬で喜びに弾けた

何故なら今月も彼は懐が苦しかったからだ

食費は削れるけれども 食わないわけにはいかない

一人暮らしで知った喜びはタダでご飯が食える事だった

「そうだな そうしろ」

マスターの一押しに ロウは笑顔で謝辞を述べた

「そんじゃ　ありがたく頂きます」

「分かったわ」

言いながらリサは荷物を持ち　店の奥に消えた

その後姿を見送りながら　ロウはふとある事を思い出す

「そう言えばさあ　マスター　ちょっと聞きてエんだけど」

「うん？　どうした？」

マスターはグラスを磨く手は止めず　顔だけ上げる

「何でリサさん　あんな良い蹴り出せんのか？」

「…ケリ？　蹴りって？」

マスターは意味が解らんと　首を傾げた

ロウは　リサに初めて会った時の事を思い出していた

油断していたとは言え　女性に蹴りを食らって

そのまま気絶させられるなんて　彼は初めてだった

何かの格闘技経験者かと　ロウは考えていた

だがマスターは笑いながら首を横に振った

「いや 俺が教えた」

「えっ？ マスターが教えたの？」

「ああ 痴漢にでもあつた時の護身用にな」

護身用と言われ 何となく納得しかけたが

マスターの次の言葉でロウは呆れ果てた

「ホントなら蹴り上げろって教えたんだけどな……」

マスターは相手の顎先を蹴り上げろと言う

ロウはそりゃ無茶だろうと苦笑いを浮かべた

「素人の女性にさ 相手の顎先狙えなんて教えねえだろ 普通」

そもそもそこまで足が上がらないとロウは笑う

だがマスターは「顎先？」と首を傾げた

「ああ 違う違う」

意味を理解して マスターは首を横に振った

今度はロウが「あれ？」と首を傾げた

「立ってる奴の股間を蹴り上げろって言ったんだよ」

それを聞いてロウは「うっ…」と顔を歪めた

想像してヒュンとしたものを下腹部に感じていた

そんなロウを見て マスターが悪戯っぽく笑った

「つま先で蹴るのがポイントだ」

「……いや…死ぬって…」

2匹のカラス

寸刻前までは建築物だった物が

原型留めぬ一個の礫と化していた

その身が果てた姿を嘆くように

カラカラと音を立てて鳴き崩れ

カツンと断末魔を残し地に落ちる

辛うじて廃ビルだった名残りの巨壁も

ACが1体 盾代わりに巨躯を隠していた

ビルの残骸が弾雨に晒されるのは明白であり

過たずして瓦解するのは目に見えていた

黒を基調に紫の配色を施した4脚のACが

頭部だけを瓦礫の山から覗かせ辺りを窺う

そこにあるのは静謐 耳が痛い程の静寂な空間

ただ 肌が切れそうな敵意だけが満ちていた

？オールド・ザム？ の打ち捨てられた一角

巨大な建築物は存在するだけで威圧的である

加えて人の熱を失った廃ビルは寒々しくもあり

それが乱立する様は 夜の闇と相まって

鬱蒼と茂る森の木々にも似ていた

コンクリートジャングルとは言い得て妙である

確かにそこに 二匹の獣がいた

姿こそ鉄の塊ではあったが

爪と牙は生物のそれよりもなお鋭く

伶俐狡猾にして機略縦横に長けた鳥が二匹

相手の喉笛を噛みちぎらんと 息を潜めていた

静まり返る空間に耳を聳する銃声が響く

音は大気を震わせ 同時に4脚ACの足元で爆ぜた

まるで威嚇の様に 居場所は知れてるとばかりに

「そんなに続きがやりたいってか？」

ロウがマスターと呼び親しむ男は皮肉げに口角を上げた

軽口を叩いてはいるが 余裕があるとは言い難い状況だった

男の腕は上の上に分類され 技術的にも極まっていた

火星のアリーナでは唯の一度の敗北も無く

彼の乗る機体を見れば 誰もが戦慄し死を覚悟した

故にその機体は ？デスマスク？ と名付けられていた

そんな彼が だが今は焦りのあまり胸中で舌を打っていた

徐々に徐々に 罠に嵌められている様な感覚に苛立っていた

相手には自分の居場所を知られているのに

相手の居場所を 彼は追いきれないでいた

男は弾丸の飛んできた方角から

相手の位置を凡そ推察すると

予想以上の近さに渋面を浮かべた

緊張の度合いが一気に増していく

- - - - - 出るか…それとも待つか…

出るなら待ち伏せを覚悟しなければならぬ

その場合 大きな代償を彼は支払う事になるだろう

では待つべきか？ 彼の中でその選択肢こそ否だった

相手の持ち駒 武装の一つがそれを許してはくれない

それを彼は知っていた 自分も愛用しているからこそ

その運用法と威力は彼自身が熟知していた

ガチンと金属同士が接合する音を 男は確かに聞いた

やっぱりそうきたかと 予想通りの最悪な現実

男は胸中で舌を打ち 周囲に素早く視線を巡らせる

何処から狙われているのかも分からない

それは全くの勘だった 男は意を決して右に跳んだ

- - - - - その数秒後

耳朶を震う爆音 そして火球

熱の塊がビルを破砕し塵埃が舞う

4脚のACは姿を晒して疾駆する

だが相手は攻撃を仕掛けて来なかった

男にはそれが恐怖に感じられていた

確実に目標を巣穴から炙り出し

確実に追い詰めて 確実にトドメを刺す

…サド野郎め…戦い慣れてやがる…

男は気鬱な溜息を吐いて愚痴を零した

廃ビルから廃ビルへと4脚のACは

出来るだけ位置を掴ませないように

次から次へと移動を繰り返す

出来る事なら相手の背後を取れないかと

その姿を探し求めながら隙を窺っていた

だが相手はそれすらもお見通しだった

「……ヤルじゃねエか」

男は頬を引き攣らせると 賛辞を搾り出した

4脚のACが飛び込んだ廃ビルの先に

膝頭を地につけ グレネードランチャーを構える

鈍色のACの姿がそこにあつた

男は呆れた目を向け 鼻を鳴らして嗤つた

そして夜気を焦がし大気を震わす轟音が響いた――――

店の扉はすっかりイカレちまつたらしい

開閉の度にキイキイと甲高い音で鳴いた

最初は耳障りに聞こえちゃいたが

慣れつてのは怖いもんで

最近は特に気にもなくなっていた

そもそも客があんま来ないんだから

扉が開くつて事自体が稀なんだけどな……

なんて事を考えながらグラスを磨いていると

驚いた事に店の扉が甲高い音を響かせて開いた

客かと思つて内心冷や冷やしたけれど

扉の陰で顔を覗かせたのはリサさんだった

オレと目が合うと笑顔を浮かべた

思わず安堵の溜息を漏らす

まだ接客つてのには慣れちゃいない

「お疲れ様　ロウ君」

「お疲れっす」

リサさんは探しモノでもする様に

辺りを見回したあとで　「あの人は？」

どうやらマスターを探してるらしい

それに頭を振る　「まだ帰ってないよ」

「そう…」　　残念そうに彼女は呟いて

マスターを心配してるんだろう　溜息を吐いた

「仕方ない」　　そう呟いてカウンターの席に腰掛ける

丁度斜向かいの席に座ったりリサさんを横目に

少し思案する まさか酒出す訳にもいかないし

ジュースなんて気の利いたモンもありやしない

仕方ねえから妥当な線で水って選択をオレはした

洗って拭いたばかりのグラスを手にとって

氷塊を2個 グラスに落としこんで水を注いだ

「どうぞ」 そのグラスをリサさんの前に差し出す

「ありがとう」 リサさんはそう言って受け取ると

グラスを左の掌で弄び 何故かオレを眺めていた

頬杖をついて微笑むリサさんがイヤに大人っぽくて

目のやり場に激しく困った 少しだけ鼓動が早くなった

…人妻…人妻…落ち着けオレ…

顔が赤面してないか気になって仕方なかった

リサさんから目を逸らしてグラス磨きに没頭する

胸中では必死こいて深呼吸を繰り返していた

そんなオレの心情を知ってか知らずか

リサさんは覗き込むようにオレの顔を見て

「どう？ もう店には慣れた？」

オレは顔を引き攣らせながら 何とか笑みを形作った

「お陰さんでね グラス磨きと掃除は出来るようになったよ」

「………そう 何故かオレは マスターの店で働いていたりする

あれは数日前の事だった いつもの様に店に来て

「よっ マスター」 右手を上げていつもの席に腰掛けた

マスターも いつもの様に素っ気なく返事を寄越した

ただ いつものいつもと違うのは そっからだった

「………報告と提案 先にどっち欲しい？」

グラスを磨く手を止めずにマスターが言った

マスターが何を言っただのか分からず眉を顰め

思わず首を捻る 「なに？ マスター突然？」

この人はいつもそうだ 突然訳わからん事を言う………？

「………報告？ 報告って………もしかして？！」

やっと気付いたか　そう言いたげな目で

マスターは不敵に口角を上げてみせた

自信有りげなその表情に心臓は跳ね上がった

「どっちにすんの？」　マスターが急かす

それに即答で返す　「報告で」

「だろうな」　マスターは笑って頷いた

「オーケー　まずはコレ見てくれ」

そう言つてマスターが差し出したのは

見覚えのない女の子の写る2枚の写真だった

「……………なに？」

1枚目には　大体15歳位だろう

髪が長い　タレ目の可愛い女の子

目元以外は何処となくリアンに似てる

次に　2枚目の写真に目を移す

黒髪が長いのは1枚目と同じだった

ポニーテールの活発そうな女の子

ただ 1枚目より年齢が少し上？

パツと見じゃ17・18位に見えた

少しだけツリ目なのがリアンに似てる

……その写真を見て 俄に違和感を覚えた

その正体は何だか上手く掴めずにいると

マスターは話しの先を構わず続けた

「お前の話すと 預かってるリアンちゃんの写真から

氏名・年齢・性別・容姿・経歴・現状を調べてた訳だ

で その中から絞られたのがその3人」

「3人？ 2枚しか写真ねエけど……」

聞き間違いでも気のせいでもない

マスターは2枚の写真しか寄越してない

それなのに3人ってのはどう言う……？

「まあ良いから話し聞けって」

マスターはそんな焦り気味のオレに苦笑し

落ち着けよと言って水を差し出してくれた

マスターに謝辞を述べ グラスを受け取る

水を少しだけ煽って そこで初めて気付いた

自分が思ってる以上に喉がカラカラになっている事を

心臓が早鐘を鳴らす度に喉の渴きは加速していく

グラスを持つ手は水で 反対の手は汗で濡れていた

自分じゃ意識してなかったけど すげえ緊張してる

落ち着け落ち着けと 胸中で繰り返し呪文の様に唱える

大きく息を吸って そして大きく息を吐いた

マスターに頷く 「大丈夫 話し聞かせて」

マスターは頷き返した 「じゃ まずはこの子」

オレが手に持つ女の子の写真を指差しながら

「彼女の名前はエレン 写真は15歳の時」

？時？？ マスターの語る口調に違和感を覚える

何だか変じゃねえか？　まるで過去形みたいに聞こえる

オレがそれを問い質すより先に　マスターは話しを続けた

「その子は顔が似てると　経歴も似てるので選んだ」

まあ　言われてみれば顔は似てるかも知んない

でもこのタレ目はちよつと違うと思うんだよな

こんな天然っぽいカワイイ系じゃなかったし

成長してまさか目元だけ変わるってのもなあ…

「つか　経歴って？」

写真から顔を上げてマスターを見上げると

気のせいか　マスターの表情が険しかった

その目には　怒りにも似た色が浮かんでた

少しだけ気圧される　何でそんな顔……？

でも　その答えはすぐに分かった

「その子は元々養子で　しかも記憶を失ってたんだと」

「記憶喪失ってヤツ？」

「ああ」 マスターは頷いた

なるほど 確かに養子ってトコは似てる
記憶云々ってのは的外れって感じかな

「しかも行方不明になってたんだ」

「行方不明!？」

マスターの言葉に オレは耳を疑った

そしてマスターの言う 経歴の意味を理解した

「ああ 彼女は突然いなくなったんだと

最後に目撃したのは彼女の母親だったらしい

リビングで寛いでたら 彼女が出掛けるって

友人の家に行くって言って それっきりさ

そのままどっかに消えちゃったらしい

それから1年後に発見された……死体でな」

死体 その単語を聞いた瞬間 背中に冷たい物が走った

喉の渴きは最高潮 言葉も上手く紡ぎ出せずにいた

たった一言搾り出すのにも かなりの労力を要した

「…なん…で…？」

マスターは だが頭を振った 「さあな」

「誘拐か 事件に巻きこまれたか 事故だったのか

今も詳細は不明 しかも1年も発見されないでだ

見つかったのだって 単なる偶然だしな」

オールド・ガルの打ち捨てられた倉庫に

白骨化した状態で彼女は発見されたと

マスターは溜息を吐きながら教えてくれた

オレも リアンと同じ位の子の死を聞かされ

どうしようもなく 重たい気分になっていた

マスターが 「大丈夫か？」 と気遣ってくれた

それに何度も頷いて 「大丈夫」 と言葉を返す

「話し続けるぞ」 マスターが言った

「次の写真 名前はリアン…リアン・コーウェン

聞いての通り名前と　あとは経歴で判断した」

「経歴つて……」

また経歴の一致かよ…

何となくイヤな予感がした

そしてその予感は的中する

「この子もな　行方不明になってた」

今回も　最悪の結果が頭をよぎる

でもマスターは　その予想を否定した

「この子は生きてる」

「ホントに?!」

安堵した　純粹に良かったって思った

リアンが見つかった訳じゃないのに

オレは頬が緩むのを感じた

「ああ　運良くどこぞのレイヴンに助けられたんだとさ」

彼女が目覚めました時　見知らぬレイヴンが傍にいた

でも何で自分がそこにいるのか　そして自分が誰なのか

彼女は一切の記憶を消失していたとマスターは語る

「…また…記憶喪失…？」

さっきの子と言い　この子と言い

共通点は拉致された事と記憶喪失

記憶を無くする程の原因って何だ？

外部からの激しい衝撃？

恐怖による精神的な逃避？

マスターもそこが気になっていたらしい

でも　その詳細までは掴めなかったと言う

「ただな…」　マスターの表情が変わった　「似てねえか？」

写真を…彼女達の顔を指さしながら言った

マスターはこの二人が引っ掛かるらしい

似てる…？　その言葉を頭の中で反芻して

そこでハッとする　さっきの違和感の正体が

マスターの言葉で姿を現した 理解できた

そうだ この子達とリアンが 似過ぎてんだ

顔もそうだけど 雰囲気に至るまでそっくりだ

しかも経歴も同じってなると 偶然って言えるか？

マスターが似てる子を絞ったってのを抜きにしても

こりゃちよつと変じゃないか……？

違和感に気づいて 更にデカイ違和感にぶち当たる

何だか分からないけど 彼女たちの後ろにある何かに

オレは薄気味悪いものを感じていた

「……まさか……な」

不意にマスターの呟きが耳に届いた

俯いたまま 考え事の仕草のまま

独り言をマスターは呟いていた

そして顔を上げジッとオレを見つめる

でも マスターと視線が合わなかった

まるでここに居ない別な誰かを見るような

そんな目で マスターはオレを見ていた

「マスター？ どうかした？」

首を傾げて問いかけると マスターは頭を振る

「いや…何でもない」

そう言いながらも マスターの表情は翳っていた

マスターは一旦店の裏に引き籠もると

数分後に 何もなかったように戻ってきた

「それで？ 最後の3人目は？」

マスターは言った 心当たりは3人だって

でも 3人目の写真は未だにお目に掛かれてない

店の裏に行ったから 持ってくるのかと思ったけど

どうやらそれも違うらしい マスターは手ぶらだった

マスターはオレの問いかけに 何故か眉を顰めていた

頭をボリボリと掻くと 「うーん…3人目なあ…」

バツの悪そうな顔で 言い辛そうにしていた

何がそんなに困ることあんだろうと首を捻ると

「話すのは良いんだけど…先に言っとくぜ？ 信憑性は0だ」

マスターは不確定が過ぎる話だと前置きした

それはマスターにしちゃ珍しい反応だった

いつも無駄に自信満々なマスターが

そんな態度をするなんてよっぼどだ

「別に構わないけど…」 オレは首肯した

何だって良い リアンに近づけさえすりゃ

だからマスターの言葉には興味があつた

どんな事でも知りたいと切望してた

でも マスターが言い淀んだ理由を

オレは話を聞いて理解した

「お前 緑色のACって見た事あるか？」

マスターはそう口火を開いた

その質問はハッキリ言っ て意味不明だった

緑のACを見た事無いって訳じゃない

寧ろその逆だった あり過ぎていた

そりゃ 緑色の好きなレイヴンだって居るだろうさ

んな事よりも なんで今ACの話が出るのか

オレが知りたいのはリアンの事であつて

緑大好きナチュラリストの話じゃない
自然派志向

「… 緑つて… そりゃあるさ 何処にだっているだろ？」

当たり前だろつて顔でマスターを見上げる

「だろうな」 マスターは言っ て 「そりゃそうだ」

さっぱり見えないマスターの意図に首を捻る

するとマスターは 「それじゃ」 頷いた後で

「こんな話し聞いたことあるか？」 と続けた

「緑色のACで とんでもないヤツがいるって聞いたことは？」

それは知らない　ってかあんまり他のレイヴンに興味ない

だから自然の成り行きで　ACにも興味はあまり沸かないでいた

自分が乗ってんのだって　金稼いでリアン見つけるためだけの

言っちゃえば手段の一つに過ぎやしない　それ以上でも以下でもない

「んにや全然…とんでもなく強いとか？」

「話しじゃな」　マスターは首肯した　「それもかなりの腕らしい」

まあ　そんな奴だって居るだろうな　それがオレの感想だった

敵にならなきゃそれで良いや程度にしか　オレは考えちゃいなかった

それよりも　未だにマスターが何を言いたいのかわからない

「ACとリアンって　何か関係あんの？」

話しに全然繋がりにゃえんだけど　リアンとACって

そりゃさ　リアンが緑のACで暴れてるってんなら

筋道通った話しになるだろうけど　そりゃ無いだろう

リアンがレイヴンってとっから前提が違ってる

有り得ねえ話だと　自分の仮説を胸中で自嘲した

「そのACに乗ってるのが？リアン？って奴らしい」

マスターの話して時間が止まった 思考が停止した

言葉を反芻すること優に1分 理解するのに更に30秒要した

結果 意味がわからなくて素っ頓狂な声を上げた

「はあ??」

冗談みたいな突飛な展開 洒落にしたってキツすぎる

設定からして無理ありすぎる 話しは早々に破綻すんぞ

コミックブックで言う所の打ち切りコース一直線だ

ニュース・メディアのゴシップ欄だって

もう少しマシな話しを載せるだろうよ

今まで散々死んだだの誘拐されただのと言われて

最後の最後でレイヴンになったと来たもんだ

「……マスター…そりゃ信じられねェわ…わりいけど」

断つとくが オレはマスターに全幅の信頼を置いてる

信心って言うっても間違いじゃないとオレは思ってる

だけどコイツはあんまりだ 度が過ぎてやがる

それはマスター本人も自覚があつたんだろう

「だから言つてんだろ？ 信憑性は0だつてよ」

シレッとした顔で でも苦笑に口を歪めた

そんな話しの出所をマスターに問い質すと

ちよつと困つた顔をしながらマスターは教えてくれた

要約すると マスターの知り合いのレイヴンに聞いたらしい

その知り合いのレイヴンが仕事で出向いた所

偶然一緒になつたのが 今話題の緑のACつて訳だ

2人は別々に行動しながら依頼は無事完遂

合流するために緑のヤツを探しに行つたら

ソイツは取り込み中だつたらしい

5体のACに囲まれて 戦闘の真つ最中だつたと

結局緑のACだけで全部の敵を片付けたつて話しだつた

「でもさ それだけでそんな噂が流れるのって変じゃない？」

実際 その何倍も倒してるのに噂にもならない人もいるんだし

まあ 噂にはなってないだけで 大事件には発展してんだけどね

目の前の男 マスターを見上げながら胸中で苦笑を浮かべる

でもマスターは 肩を竦めて頭を振った

「ああ 囲んでたのは 残りの5体だったんだと」

「残り？」

「緑のソイツの周りに ごろごろ転がってたんだとさ 鉄屑が」

その数は1体や2体なんてもんじゃなく その10倍はあったとか

飽く迄伝聞だから 話しは半分で聞いた方が良さだろうな

だって 20体近くのAC倒したなんて言われても 信じられるか？

マスターも苦笑交じりな辺り 全部信じてる訳じゃないらしい

「んで最後の一体潰した後で 油断でもしたんだろうな

まだ生き残りがいたらしくて 背後から襲われたんだと」

「へえ そんなに強くても油断すんのかねえ」

その質問は 誰あろうマスター本人にしたものだった

強いんだから分かるでしょ？　と言外に含ませて聞く

でもマスターは「知らねえよ」　突^つつ慥^{けんどん}に答えた

「まあ人間だし　少しくらいミスはあんだろ」

その代償は高えけどな　マスターは自嘲気味に笑んだ

そう言えば　マスターは油断して殺されたって話しだった

それを思い出して　しまったとマスターの顔を窺ったけど

表情はいつも通り　気にもしてない風で安心した

「で　それを知り合いが助けたんだと」

それも杞憂だったとマスターが言った

緑のACはそれに気付いてたらしく

マスターの知り合いと　緑のACは

ほぼ同時に残党に弾丸を叩き込んだらしい

「で　あまりの良い腕だったんで　ソイツの名前聞いた」

「したら　？リアン？って名乗ったと……」

「そう言う事」　マスターはオレの言葉に首肯した

「アイツも驚いてたよ 声聞いたら女だったってな」

話しはそこでようやく繋がった やっぱ眉唾な話ではある

でも リアンって女レイヴンがいたってのは事実だろう

想像だけでそんな名前出すなんてのは考えられない

それでもオレは 俄に信じられない思いだった

あの泣き虫で甘えたがりなレイヴンなんて……

思索と感傷に耽るオレにマスターは「でだ」

切り出したマスターの言葉で現実に戻された

どうやらリアンについての報告は終わりって事らしい

「次な 提案なんだけどもだ」

そう言えば 報告と提案があるって

何の事かと首を傾げていると

マスターはやおら嘯いた

「お前 ココで働け」

マスターと見つめ合う 瞬きを数度

そして困惑の表情を浮かべてみせた

でもマスターはいつもの調子で

オレを置き去りにして話を進める

「なに 俺が留守の時に店番と掃除してくれりゃ良いから

仕事内容は至って簡単だろ？ オマケでリサの飯も付く」

リサさんの手料理は心底そそられた

危うくふたつ返事で引き受けるトコだった

でもちよつと待ってくれよ 意味が分かんね

何でオレがこの店で働かなきゃいけないんだ？

イキナリ雇うって言われても正直返答に困る

オレだってレイヴンの仕事があっからなあ……

「いやな 前みたいな事あるとヤツカイだからよ」

「前みたいな事って？」

自分の行いを鑑みて ? 前みたいな？の意味を考えたけど

やっぱり心当たりがなかった オレ…何かしたっけ？

オレの疑問にマスターは答え　そして納得した

「俺が行く先々でお前がいたら　いつか殺しちゃう」

意味を解した　なるほどそういう事かと得心した

マスターは次々と武装組織を壊滅に追い込んで

オレが間違つて武装組織の依頼を受けちまつたら

いつかはマスターと鉢合わせしないとは限らない

その時は確実に　オレはマスターに殺されるだろうな

「お前を殺しちまうのだけは勘弁な」

軽く肩を竦めながら　冗談交じりでマスターは言った

でもそれは冗談なんかじゃなくて　可能性は零じゃない

オレも同感だ　マスターとやるのだけは御免被りたい

確かにレイヴンの仕事もある　リアンも探しに行きたい

でも　心配してくれるマスターの申し出を断る事も出来ない

だからオレは　マスターに頭を下げた　「不束者ふつつかものですが」

これが1週間位前の話し　そしてオレは晴れてバーテンダーに転職した

でも オレが相手にする客は目下の所リサさんだけだった

当のリサさんは 何やら仕事に精を出していた

携帯用の端末を使って何やら打ち込んでいる

メガネを掛けて 少し難しい顔をしてる様は

研究者の様な雰囲気醸し出していた

不思議と堂に入って似合うなと思った

……こう見ると やっぱリサさんは年齢不詳だよな

雰囲気のせいだろう とても女性らしい柔らかい時もあれば

酷く無気質で無感情な 客観的に物を見る目をする時もあった

それはただ観測するだけの視点 冷たい眼差しとも言つか……

マスターもそうだけど この人もやっぱ謎だわ

「……ロウ君？ どうかした？」

グラスを磨きながら呆と思案に耽るオレを

リサさんは心配そうな瞳で覗き込んでいた

「何でもないっすよ」 オレは頭を振った

曖昧に笑って 別な事を口にして話を誤魔化した

「マスター遅いなって思ってただけなんで」

話題を逸らす為の言葉だったけど

ソイツはオレの本心でもあった

リサさんも同感だったらしい

さっきから何度も入り口に目を向けていた

「客が来ないうちに マスター帰ってこねえかな」

オレの言葉に リサさんは入り口の扉を見詰めて呟いた

「……そうね」

オールド・ザムの打ち捨てられた一角で

静寂と共に1体の4脚ACが佇んでいた

四つ足のその機体は まさに獣

闇の中 獲物を狩らんとする狩猟動物のそれに近い

……だが その獲物となる標的が何処にも存在しなかった

嵌められたか？

男の元に ある武装集団に動きがあるという情報が入った

そんなにアイツが欲しいのかと 男は呆れ果てていた

それでも男は成すべき事を淡々と遂行するだろう

だが 男は訝しげに眉を寄せた

情報では 男のいる場所に武装集団が息巻いて集結してる筈

だと言うのに そこは蛻もぬけの殻だった

確かに今回の相手は異質だった そもそも名前からして奇妙だった

？イミネート・ストーム？なんて いつの時代のテロ組織だよ

男の記憶では100年近くも前に消えている 骨董品も甚だしい

まあ クローム社と一緒に消えたつてのが かなりアレだわな

男は皮肉げに いつの時代も変わんねえなと鼻を鳴らした

「にしても……」

これは変だ 男の本能がそう告げていた

辺りを見まわしてみても 動いている物が無い

ココには始めから誰もいなかったと言っのなら

それはそれで男は納得しただろう

ガセネタ掴ませやがってと憤り

情報源の男に酒でも奢らせれば終わる話だ

だがそうではなかった　それで終わりではなかった

4脚ACの周囲に残骸が散らばっていた　痕跡があった

山と積まれたACだったモノやMTだったモノ

その鉄の塊が屑となって散らばり転がっている

どうやら　先客が居たみてエだな

男は表情に警戒の色を濃く滲ませる

それが過去形で？居た？ならまだ良い

だが　現在進行形で？居る？の方こそ

男にとっては確率が高いと踏んでいた

問題は　これを行ったのが誰なのかだった

仲間内での同士討ちをまず考えたが

そのメリットが見出せずに答えを保留した

次に複数のレイヴンが依頼を受けて壊滅させた

可能性は無いはない それなら納得もできる

複数体のACなら容易く事を成せるだろう

問題は コレをたった1体でやらかした場合だった

それはつまり常軌を逸した腕の持ち主である事を意味する

男は どうか何も出ませんようにと心の中で祈りつつ

気配を探りながら 廃ビルに身を隠しながら探索を開始した

目につくのは壁に無数の穴を穿つ弾痕 実弾が多く見受けられた

男が尚も周囲を探索しようと一步を踏み出した時だった

不意に頭上で^{きこ}足音が響くのを 男の耳朵は確かに捕らえた

4脚ACは空を仰ぎ見るより先に 素早く廃ビルの陰に身を隠した

その判断は勘と言うしかなかった そしてそれは限りなく正しかった

廃ビルの屋上で破裂音が響いた 次いで煙を伴い複数のミサイルが

4脚ACを食い破ろうと迫る それをビル壁が悉く身代わりとなった

男は廃ビルの屋上から落下する光源を確認した。それはACであった。

4脚ACは右肩のグレネードランチャーを敵ACの着地点に放つ。

普通ならこれで終わる筈が、今回はそうならなかった。

敵ACは空中で滞空すると、お返しとばかりにミサイルを放つ。

4脚ACを包むようにミサイルが4つに分裂する。

その様はまさに、獲物を捕らえる爪に酷似していた。

男はディスプレイの表示を押す？OVERD BOOST？

それと同時に、もう一つ別に表示されている文字を押す。

そこにはこう記されていた？EXTENSION？

両肩部にあるハードポイントに搭載された2つの装置が、

カシャンと言う音と共に口を開く。中には幾数ものミサイル

それは攻撃用のモノではない。防御のためのミサイル。

一対ミサイル用迎撃装置《BEX-BAMS-287》

両肩から2発ずつ迎撃用ミサイルが射出される。

敵のミサイルを3発迎撃する。だが、落とし損ねた1発が、

4脚ACに目掛けて飛来する

間近にミサイルが迫る　あと瞬き二つ分で直撃するだろう

だがそれよりも早く　エネルギーの集束は終わっていた

男の体に急激なGが掛かる　機体が凄まじい速度で弾ける

その速度の中で　迫り来るミサイルを左に余裕で躲す

機体はその速度を保ったまま　ミサイルを放ったACへ接敵する

しかして男の目が捕らえたのは

膝頭を付き　？何か？　を構えるACの姿

4脚ACは急遽OBを切る　敵ACに向かって右手の銃を構える

敵の放つ弾丸は—EW C - GN 44 - ACの凶弾
グレネードランチャー

撃たせる前に仕留める

男は冷静に戦況を解して　尤も効率よく相手を屠る手段を算出した

しゃがんで身動きできない敵ACへ　右手の銃を狙い定める

だが　それを相手のレイヴンは察したのだろう

ロックオンサイトが4脚ACを捕らえる前に

己の勘と技量だけでグレネードを放った

同時に男もKARASAWA-MK2のトリガーを引いた

4脚ACの放った光弾は 敵ACの右側面を掠めて飛んだ

直撃こそしなかったが それを見越して射撃だった

光弾が掠めた衝撃で敵ACの狙いは僅かに外れ

4脚ACへのグレネードの直撃を妨げた

その 死を具現したような恐ろしい熱量

そして威力を持った火の玉は側面の壁を穿ち

辺りを一瞬で塵芥と変えて ようやく静まる

爆風と塵芥が舞い お互いの視界を遮った

2体はほぼ同時のタイミングで右へ飛んだ

視界が効かない以上 そこに立ち尽くすのは論外

そんな愚行を許すほど ふたりのレイヴンは初心^{初心}ではなかった

だが 機体の重さが4脚ACの行動をワンテンポ遅らせた

その遅れも 常人であれば迅速に過ぎるものではあったが

ことこの2体の戦闘においては決定的な差を産んでしまう

結果 敵ACの姿を見失い 4脚ACは自分の姿を晒してしまった
再び静寂が訪れる

寸刻前までは建造物だった物が

原型留めぬ一個の礫と化していた

その身が果てた姿を嘆くように

カラカラと音を立てて鳴き崩れ

カツンと断末魔を残し地に落ちる

辛うじて廃ビルだった名残りの巨壁も

ACが1体 盾代わりに巨躯を隠していた

ビルの残骸が弾雨に晒されるのは明白であり

過たずして瓦解するのは目に見えていた

黒を基調に紫の配色を施した4脚のACが

頭部だけを瓦礫の山から覗かせ辺りを窺う

そこにあるのは静謐 耳が痛い程の静寂な空間

ただ 肌が切れそうな敵意だけが満ちていた - - -

静まり返る空間に耳を聳する銃声が響く

音は大気を震わせ 同時に4脚ACの足元で爆ぜた

まるで威嚇の様に 居場所は知れてるとばかりに

「そんなに続きがやりたいってか？」

男は弾丸の飛んできた方角から

相手の位置を凡そ推察すると

予想以上の近さに渋面を浮かべた

緊張の度合いが一気に増していく

- - - …出るか…それとも待つか…

出るなら待ち伏せを覚悟しなければならない

その場合 大きな代償を彼は支払う事になるだろう

では待つべきか？ 彼の中でその選択肢こそ否だった

相手の持ち駒 武装の一つがそれを許してはくれない

それを彼は知っていた 自分も愛用しているからこそ

その運用法と威力は彼自身が熟知していた

ガチンと金属同士が接合する音を 男は確かに聞いた

やっぱりそうきたかと 予想通りの最悪な現実

男は胸中で舌を打ち 周囲に素早く視線を巡らせる

何処から狙われているのかも分からない

それは全くの勘だった 男は意を決して右に跳んだ

- - - - その数秒後

耳朵を震う爆音 そして火球

熱の塊がビルを破砕し塵埃じんあいが舞う

4脚のACは姿を晒して疾駆する

だが相手は攻撃を仕掛けて来なかった

男にはそれが恐怖に感じられていた

確実に目標を巣穴から炙り出し

確実に追い詰めて　確実にトドメを刺す

…サド野郎め…戦い慣れてやがる…

男は気鬱な溜息を吐いて愚痴を零した

廃ビルから廃ビルへと4脚のACは

出来るだけ位置を掴ませないように

次から次へと移動を繰り返す

出来る事なら相手の背後を取れないかと

その姿を探し求めながら隙を窺っていた

だが相手はそれすらもお見通しだった

「……ヤルじゃねエか」

男は頬を引き攣らせると　賛辞を搾り出した

4脚のACが飛び込んだ廃ビルの先に

膝頭を地につけ　グレネードランチャーを構える

鈍色のACの姿がそこにあつた

男は呆れた目を向け　鼻を鳴らして嗤った

そして夜気を焦がし大気を震わす轟音が響いた

それは 躲せない - - - なら 躲さない

4脚のACはKARASAWA-MK2を構える

狙いは迫り来る火球 その中心

トリガーを引く

残弾全てをグレネード弾に叩き込む

光弾は火球に吸い込まれるように消える

そして弾けた そうとしか表現できなかった

距離にしてお互いの中心

そこで炎の固まりは爆風と閃光を残し 弾けて消えた

眩いばかりの光がその場を昼の明かりの様に照らし出した

その時 ふたりのレイヴンはお互いの敵を視認した

黒を基調に紫の配色を施した4脚のAC

鈍色で統一した2脚のAC

お互いがお互いの敵を認識すると

2体のACはやおら機動を開始した

その目を潰す閃光と荒れ狂う爆風の中

ただ一直線に相手に向けて疾駆する

最初の一太刀は4脚のACからだった

左腕から伸びる3本のまさに爪

ブレード ? Z L S - T / 1 0 0 ?

真横に振るわれた刃を 鈍色のACは後に下がり躲す

返す刀で鈍色のACは左腕を振り上げた 蒼く煌く刀身

ブレード ? L S - M O O N L I G H T ?

蒼い軌跡が振り下ろされる 4脚のACはそれを側面に回避した

お互いが左腕を振り下ろすと同時にお互いが右腕を掲げた

4脚ACの持つ? K A R A S A W A - M K 2 ? が

2脚ACの持つ? E W G - M G S A W ? が

2つの銃が お互いの頭に銃口を突きつけ合う

必殺の距離で だがどちらもトリガーを引かない

いや 戦闘行為自体を お互いが放棄していた

代わりにコックピットの中で ふたりのレイヴンが笑い転げた

心の底から楽しそうに 自分達の馬鹿さ加減に腹を抱えていた

再会を果たした友へ 銃弾の代わりに言葉を吐き出した

「相変わらず良い腕してんなあ」

4脚のA Cが 左手を握りしめて前に掲げた

「お前もな 鈍ってないようで安心した」

2脚のA Cが 左手の拳を相手の拳に打ち付けた

友との それが再会の挨拶だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876z/>

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N - 過去編

2012年1月13日01時59分発行